WASON
LH2
1104
Jun. 1895
no. 411

明治十八年初刊

女學雜誌

每月廿五日發兌

第四百拾壹號

要目

ノースロップ先生　中村茂策
先生來遊後親炙せしの人茲に先生を傳す。

朝鮮の官妓　齋藤音作
渡韓實視の記、多く獲がたき有益の報告。

宗教的東方問題

女子教育大勢の實跡

無意識論

職業教育職業的教育

望月峯吉君追懷

美觀、廢娼論　花影子
眞情流露、誠氣人を悲動せしむ。

山水の影 長歌　流水庵
九篇一万言、新体歌優等の好調。

明治二十八年六月二十五日發兌

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第四百拾壹號目次

社説
宗教的東方問題

女學
女子教育大勢の實跡
女生普通教育
職業教育、職業的教育

評論
無意識論
望月峯吉君
國家教育の名に惑ふ

隨感
血性論理○あやしき看護○義捐○古風の家屋

爛煥
博士ノースロップ先生　中村茂鏡
星夜　森愛軒
山水の影　流水庵
出立。山の朝。山中。巨岩。うぐひす。散る花。山翁。山路夕陽。山寺。
美觀廢娼論　花影子
朝鮮の官妓　齋藤音作

片々
貴婦人の義捐金募集○第三回女子夏季學校○埼玉縣公娼新置問題○朝鮮婦人最初の留學生○保姆講習所設置計畫○高等女學校設立の議○女子高等師範學校○函館婦人矯風會○長崎保姆教育會所○萬國婦人禁酒會總會○山口縣の女教師○紅情綠意○阿嬌相公○伯林結婚時期○二女の文○女劔舞○看護美談○教育大會に於る女學○農間女子の教育○沖繩の婚儀○有爵婦人募集文

前號目次

社説
轉禍成福

評論
傳道界の風雲及個人の勢力◉ナポレオン一世とペスタロッヂー(戰爭と教育)鷗村
詩二首(八木文卿)

女學
凱旋に對する家庭の歡迎◉尙武と婦女子◉軍人慰藉會◉男女別學の得失

隨感
透谷は生たり◉こゝろの影◉光明何處より來る◉達人の論理◉詩人の自殺◉親ごゝろ◉墓まゐり◉娛界公園の地

爛煥
殘影(賀古殘夢)◎行く秋のおもひ(哀蝶)◎孤兒の有樣(石田孫太郎)◎暗夢(花里)◎浦のしほ貝(冬、花下の旅客、なさけ、牡丹花、口ずさみ、無常)白衣◎出船(花影子)

片々
ことしの地久節◉帝國教育大會◉同志女子教育會◉今後の警戒◉神代の女性の爭論◉幼兒教育の調査◉婦人勞働論◉朝鮮婦人の日本留學◉戰勝地の女風◉横濱の閨夜◉日本婦人服◉韓國の婦人◉米國女子高等教育の進歩◉山口縣八代村◉峽中の女子教育◉福澤先生の古物展覽◉鐵舟居士の二令孃◉西京に於ける老監督ウイリアム◉女子講義會◉東京女學生◉馬關每日新聞の言ふ◉大坂人の結婚年齡◉海軍々人婦人會◉異例別婚者◉女學子の新領地開拓意見◉男女身體比較◉櫻井ちか女史◉天足會◉シャーランド夫人逝けり◉墺公使伯爵◉成美婦人會◉婦人大祈禱會◉所云る家事と云ふ科目につきて◉巖本善治氏と朝鮮の儒教◉女教師の得失◉國力と女子教育との關係◉文學者の關門

孤女學院特別資本募集廣告

孤女學院成立の主旨は尋常孤兒院と異なり純然女子教育の精神によりて發起建設せられたる者也。茲に創業三年の星霜を經て教育學上の進歩なみなみならず、最上級生徒の學力感ずるに足るものあり。然るに該院生計の維持は單に仁人隨時の義捐金による之を用ゐて教育上の費用に供ふ可き餘裕あらざるに付、此上一層教育上の整備を求めんに其便りを得ずとて院長は太たく心を痛めらるる由に聞けり。加之目今孤女の最長年者は既に十四歲に達せり其前途身を處するの道も亦た今に於て講ぜざる可らず。故に吾等同念の族、申合せて發起人となり、茲に天下の同志に計り、孤女學院の女子教育並に孤女立身の二つの事の爲に、院外の特別經濟として資金供給の方を與へられんことを祈る。之が爲めに定むる所の憲法如左。

一　茲に孤女學院の女學及孤女立身の二事の爲に殊に資金を募集し此資金を名けて孤女學院特別資本と云ふ。
二　此資本は院兒が從事すべき尤とも安固なる事業(最初は養蠶)に放資し其收益を積んで募集の主旨たる二事に限りて使用するものとす。
三　此資金及び其收益は孤女學院尋常の生計費に使用するを許さず。
四　收益の二分五厘を以て孤女の賃銀とし殘り五分を女學に、同二分五厘を立身費に充つべし。

巖本善治　石井ちか
小鹿島筆　加藤さし
田村武治　津田むめ
名出保太郎　小島きよ
古在さよ　青木まさ
平野はま　杉浦義道

右義捐金取次所　東京瀧野川村　孤女學院

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百拾壹號

明治二十八年六月二十五日發兌

社説

宗教的東方問題

數年前來、吾黨が同胞に警告したる『宗教的東方問題』なるもの、如今、益す切迫せり。大日本帝國の力量、世界に公開せられ、近時、勃如として、その大膨脹の勢機を決してより、此の問題や、彌よ切迫せり。

凡そ如何なる勢力ありと雖ども、義の名に於てする勢力ばかり強大なるものはあらず。義の名の存する所は、不可思議なる援助の加はる所なり。之を天佑と言はんか、之を大法と言はんか、之を人生の秘義と言はんか。凡そ、義の在る所は、聖なる能力の居ます所。喩へば靈鷹の兹に下るが如く、天のマナの兹に落るが如く、聖靈の鳩の飛び來るが如く、日光の雲を破つて射降するが如く、人力の極致、即はち、人事以外の一大勢力、嚴として此が上に其座を定めんとす。人心、苟くも此と合しなば、如何なる勢力ありと雖ども、遂に之を動かすこと能はざる也。

歐洲白皙の徒、もし利益の名に於て起つあらば、未だ懼るゝに足らず。もし權力平均の名に於て起つありとも、未だ懼るるに足らず。只だ、夫れ、義の名に於て起つことありとせば、連衡忽まち成り、一火枯草を燒き、全洲暫らくにして一大合同を遂げん。其の、異人種に對し、異宗敎の國に對する時に於て、特に尤とも然りとなす。

曰く、白皙人種以外の人種の勢力を得るは、人類惣躰の進步の爲に害ありと。曰く、基督敎以外の異敎國が勢力を得るは、世界の救濟の爲めに害ありと。凡そ此等の陳言は、或る人士の聞く所に於て、不公平、不道理の曲辨たるに過ぎじ、歐洲人にして如此く論ずるは、單に其の私利を遣るの辭柄たるに過ぎずとは見えん。然りと雖ども、論理の極致は、直覺なり、直覺の裏面は、情感なり。異習慣、異性情の人に於いて、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

極めて不道理らしく認識せらるゝの論理も、他に於ては、明白公平にして、殆んど解釋すべき必要なきが如くなること、則はち、人事の奇態なり。試ろみに、之を日常の間に視察し、大に階級を異にせる社會に徴して、其の事實を視よ。論理の終極の標準は、直覺に訴ふるの外あらざるに非ずや。而して、直覺の習慣と感情とに由りて養はるゝの所以を知らば、天下の公道に於けるの解釋にすら、東西千里、人種別色の故によりて、殆んど表裏明暗の大懸隔を爲すを怪しむことなからん也。

英國の前宰相老偉人は、一世の人傑也。彼が聰慧と、良心とを疑ふものはあらじ。然れども、彼は近日の告白に於て、基督敎國以外に眞誠の道德なきことを明言したり。夫れ、此の老偉人が、大英國に於ける不思議なる勢力の秘訣は、其宗敎上の品格にあり。彼が宗敎上の告白は、たとひ常に保守の僻を存することはありと雖ども、其告白の英國人民が宗敎上情感に和適することあるは、疑ふ可らず。

一事以て万事の類推に用ゆべきことあり。老偉人が此の短き告白は長き意味を有す。歐洲白皙人種中の、尤とも健全なる分子、又、其の保守僻あると共に尤とも手堅き分子、一言するに、歐洲文明國の骨となり、心膽となれる人士の直覺に於ては、白皙人種以外の人種が勢力を博し、基督敎國以外の異敎國が大に勃興するは、即はち、人類と世界との大害惡なることを感知するに於て、甞て遲鈍なることあらざるべき也。故に、彼等は、此の害惡ある勃興を防遮するが爲には、義の名に於て、信仰の名に於て、故に、神聖なる上帝の名に於て、猛烈なる斷行を肯てして顧りみざるの眞勇氣を煥發し來らん。義憤、獻身、火の燃ゆるが如く起らん。聖なる十字軍は、歐洲全土を捲て一大風雲の如く立たん。此時に於ては、日耳曼人種、ラテン人種、サクソン人種は、不思議なる人種なり。たとひ人は之を迷信と言ふとも、彼等には、神聖なる確信なり、たとひ人は之を不公平と云ふとも、彼等には、正明光大の偉事なり。此の不思議なる人種は、東洋人が、迷信と嘲けり、不公平と憤ふる其事爲に、純乎たる獻牲的の大義戰を爲し、水火の中に殉死するを以て、マーターとし感謝すべし。

吾黨は、此事の是非正邪を論ぜず、只だ此に至つての事實は、必らずや此の如けんと斷言す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

之を是れ歐洲人士の爲の、宗教的東方問題と言ふ。かの商業的東方問題は、未だ懼るゝに足らず。軍港的東方問題も亦た懼るゝに足らず。獨り、此の宗教的東方問題に至つては、大いに思慮を要すべきものあり。而して、志士の未だ大いに之に着眼せざるものは、必竟、白皙人種の習慣を知悉せざるに由る。否な、假令其の尋常の習慣を知悉するも、彼等が宗教上に於ける不思議なる確信を辨知せざるに由る也耳。

吾黨は、何れにせよ、此の問題の遠からずして、絶東に押寄せ來らんとを覺悟せしが、其の來るの歩武の斯く計り急切ならんとは、意はざりき。大日本帝國は、すでに此問題の渦中に入れり。新三國同盟の相結合したる一條件、少くとも、假つて名を爲すの一辭柄には、確かに此の一問題の存せしとは推知せずや。

同胞、之に對する雄大の覺悟は如何にぞ。諸君、天下の大道に忠にして、其解釋を一新し、倒れて後ち止むの抱負ある乎。もしくは、度量を濶大にし、万國公用の『名』を採用し、グリンウィッチの緯度の名を用ひ、フランスの尺度の量に隨ふが如く、大道に附するの『名』に於て、天下の公用に從はんとする乎。

凡そ、此等の覺悟未だ決せず、雄大の決意未だ定まらず、ただ、小俠の反動に誇りて、隆んに、井中の大演説を爲すとも、遂に、世界の公道に影響するとなし。個人の一生は、人生也。國民の一生は、天下の歴史也。倒るゝも、起つも、世界の歴史を動かさずして止むは、即はち、國民としての醉生夢死に外ならず。

文學

女子教育界大勢の實跡

大勢の動くは大人の動くに同じ、ともに已むとを得ざるに至りて起つなり。されば、其の起つを禁ずべからず、其の動くを防ぐべからず。一と度び足をあげて歩武堂々として進まんとするに至れば、則はち既に如何なる障害も之を遮ぎること能はず。

蓋し、大勢の進退は、大法によりて決するなり。大法の決す

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

る所、個々の人意ありと云ふと雖ども、そも〳〵能く之を如何にせんや。

試ろみに、女子敎育界近時の大勢に就きて之を證せんか。吾讀者は、數月前に於ける本欄の一文章「女學界に於ける將來の大勢」を閲覽し、惠はひにして、尙ほ其の主旨とする所を記臆せらるゝヿならん。

曰く、男女の關係は、表裏內外の關係なり、古人之を一言して陰陽にたとふるは、頗ぶる當れり。夫れ、表裏內外は、相對比較の語のみ、故に、外表と內裏とは、一張一弛、一伸一縮して、同時に進退增減す。外表の膨脹する所以は、內裏の隨つて膨脹する所以、內裏の收縮する所以は、外表のもと收縮する所以なり。故に、男子、內國に收縮し、着眼、島裏の外に出でず、保守消極にして過去の夢に醉ひ、絕えて、積極剛猛の勇進的行爲なきの日に於ては、女性の世界も亦た隨つて收縮せざるを得ず。此時に當つて、保守僻古の大勢に趣むかんは、當然の數也。人は言ふ、近年女子敎育衰ろへたりと、女子敎育豈に衰ろふるものならんや。父母にして、其子を愛せん限り、安くんぞ獨り其が愛娘の敎育を等閑に附するとのあるべきや。但だ、其の敎育の躰は、時勢に隨がひて變ず。就中、女兒を敎育するの親心に於ては、尤とも切に世の流行に掛念せざるを得ず、之れ已むヿを得ざるの情也。左れば、近年の女子敎育は、たゞ其姿を變へたる耳、何んすれぞ、敎育そのものを全廢するヿあらんや。此故に、時勢一變せば、女子敎育方の姿も亦た一變すべし、惟ふに、此の時勢今や將に一轉化せんとする也。見よ、日本は、日本島國より亞細亞洲に出で、亞細亞洲より世界に出でたり。男子の境界は大に擴張せんとす。今後、島裏に鬱屈し、昔想に夢み、保守消極に退縮せんとするも、遂に得べからず。男子の領分は自づからに大膨脹せざるを得ざるべし。夫れ、男子の領分の膨脹するは、女性の境界の膨脹する也。女界之よりして一變動あらん。變動の生ずる所、敎育の躰趣隨つて一變す。女子敎育界今後の大勢自からに分明なるべし、と。

然るに、杞憂の人は、平和克復後に於ける尙武の煥發を以て、女子敎育の進歩に害ありと想像したり。蓋し、尙武の煥發と、文明的女子敎育の進歩との相ひ衝突せる先例なきにしもあらねど、之を擧げて日本現在の時勢に適考するの誤謬は、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

直ちに諒悟すべし。日本は、戰勝によりて、更に大難の地に近づき、門を出でゝ、初めて世界の舞臺に上らんとする也。戰ひ尙武の氣象煥發すとも、武人は之が爲に驕ることを得ず。戰ひ勝つと雖ども、之が爲に逸居することを得ず。蓋し、此の光榮によりて、更に責任を增したる也。有爲積極の氣象必らずや勃興し、弱性を玩弄し、放逸に遊び、以て忌はしき女風を招き起すが如き動機は至つて少なかるべしと。

吾黨が以上に再述せる卑見の大梗は、幸ひにして、今や其の効驗を表し、着々として、大勢の趣向を形はし、女子敎育界の生氣、勃然として大いに復興し來るものゝ如し。

新文部大臣西園寺侯の演說に云く、

善良なる國民を養生せんには必ず婦人內助の力を藉らざるべからず西洋諸國に於て女子教育に最も力を用ゆるは之が爲めなり女子自身も又十分の教育を受けて天賦の良知良能を發達せしむるは當然の事たり我が國に於ても亦此事に注意するを要す。

普通學務局長たる木塲貞長氏の演說に云く、

女子の高等教育に就ては文部に於て試驗中と云ふても可なり。監督學校には種々の干涉を行ひ居れども、一般の行政は、自然に放任し居れり。故を以て公立學校は、格別數の增減を見ざれども、宗教家の設立に係らざる私立學校も亦少からず。高等の女子教育を、全く地に落ちざらしめたるもの、是等の學校の力多きに居る。基督教の設立に係る高等女學校と雖ども、信仰自由の今日、教育の方法も進歩し居れば左迄忌むべきものにあらざれども、家庭と衝突を來すと少からざるが故に充分に發達せず。左れば今日に於て最も急要なるものは、女子の高等教育なり。圓滿にして德操高き婦人を養成するとは最、必須なるとなり。然れども是等新思想に富みたる婦人が舅姑と云へるが如き舊思想にて、固めたる人の間に處するとは尤困難なるとなり。故に新思想の調和と云ふとは、高等女學校の常に注意せざるべからざる所なりとす。次に高等女學校の規程は、全國の畫一を避けて、地方の狀況に一任せり。男子の教育の如く、更に一段高き學校の豫備ともなり、保證ともなるものは、畫一を要すれども、地方に依りて、家々の風に依りて、異なる所多き女子の高等教育は、決して全國一定に規す可らざるものあり。高等女學校に、教育科を加へたるは、女子は天然自然に、教員の性質を有するものなりと信ずるを以てなり。故森文部大臣、常に予に語りて曰く、學校には母親が其子を徵兵に出るを送る紿を掲げて貰いたいと。予今にして其先見に服す。予は最後に臨みて、文部を代表して云はん、女子教育を奬勵するは、文部の方針なりと。

辻新次氏も亦た、女子敎育の大に奬勵せざる可らざることを說けり。而して、去日西京に於ける敎育大會の大勢を評したるものは、皆な「女子敎育奬勵」の氣運勃興を以て、其一に算へたり。

吾黨は一々右諸氏の論說に同意するものにあらず、況んや、之に謳歌するをや。左れど、浮萍は以て水の流を示すべし。大數の時好の躰を形はし、普通の輿論の聲を傳ふるに尤とも有力なる此等諸器關の告白する所ろ既に如此しとせば、刻下の大勢の趣く所、正に分明に認識することを得べからずや。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女生普通教育

教育の眞との價値を辨識するには、普通教育の性質と効力とを認知するをもて第一とす。

人、往々、教育の必要を説くと雖ども、其教育なるものは、單に處世立身の資本を蓄積せしめんとするに外ならず。旨とする所ろ、現世に適應せしめ、成るべく多く、其需要を得せしめんとするに過ぎざる也。然れば、圓滿に人性を開發し、長遠の成大を望み、人類の進歩を主として、以て、社會の開達を希ふが如き大抱負は、斯る教育賛成者の決して味ひ知らざる所ろ也。

故に、教育の眞價値に對する覺悟の多少は、普通教育に對する同情の多少によりて推知せらる。これ、普通教育なるものの期望、組織、學科等は、直接實用の便利に緣遠くして、一見する所ろ、目前の利益に効驗なきかの如く見做さるゝの躰あるに由る。こゝを以て、尋常卑近の事に執着し、利害私己の觀念に沒する底の人は、大率ね、普通教育を以て効能薄き學問となし、其の卒業生は直ちに實地の用に堪へざるを嘲けりて、活學なきの證とし、切りに慷慨して偶たま以て其の見識の短野なることを自白するもの甚はだ多し。

豈にたゞ教育の事を評價する尋常人士の上に於てのみ此事を言わんや。教育者其人と雖ども、彼が普通教育を編成する理想の如何によりて、以て其の思念の遠大なるか近小なるかを卜知することを得べし。教育者中、普通教育を以て職業教育と混同するものあり。如此き人士は、未だ能く普通教育なるものの眞との意義と必要とを辨知せざる也。

抑そも、普通教育を施こすべき、學生の年代と、年數と、學科の多少、單複、難易等は、固より、國勢と、人の開化の度とによりて斟酌あるべし。然れども、如何なる年代かに於て若干の年數間、何程かの普通教育を施こさゞる可らざるは、明白なり。但だ、此の度合ひを辨知するは、識者の事なりと雖ども、斯くして定められたる普通教育そのものを尊重し、以て職業教育、（即はち現世に處する爲めの立身教育）と區別するの見識は、苟しくも常識ある人士のすべて懷抱せざる可らざる所ろにあらずや。

故に、此の普通教育を尊重するの智識ありて、初めて能く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

教育そのものの眞意義を辨知することを得べし。何んとなれば普通教育は、即はち、教育中の教育にして、教育の本色を形はすこと尤とも純、尤とも明なるものなれば也。普通教育は、混りなき水の如し、水の眞味を味はんとするものは、先づ其の無色無味なるものを掬せざる可らざる也。普通教育は、緣故なき他人の如し、人を愛する無私の愛を明らかにせんとするには、先づ此の利害を離れたるものに於て施こさゞる可らざる也。

此に於てか、女生の普通教育なるものを見るに、其意義の覺られざるや、殊に甚しと言ふべし。女子教育の事を言ふものは、大抵女子を或る事の爲の用にして教育するの利益を言ふ。直ちに女性其人の本眞を發揮し、其天然の禀質を開發するを以て要とすることを知るものに至ては、尙ほ太はだ少しと言ふべし。或ひは曰く、母妻的教育と。或ひは曰く、內助的教育と。夫れ、母妻となりて內助の事を爲す、皆な女性自然の動作なりと雖ども、此の故によつて、普通教育の主眼を、單に此一點にのみ集中せしむることはある可らず。凡そ、自然の動作は、自然の開發の結果として生じ來るべし、必ずしも單に初めより、此にのみ偏執することを要せざる也。然るに、世人、之に母妻的の教育を與へざれば則はち母妻たる可らずと思惟するものゝ如し。是れ豈に人の自然の性を疑ひ、亦た、自然の性なるものゝ勢力を認ためざるが故にあらずや。

女生の普通教育は、即はち、其の普通性の一汎開發を爲すことこれ也。之に母妻的の傾向あると共に、亦た世界的の傾向あるべし、之に內助的の趣味あると共に、亦た人類的の趣味あるべし。眞とに普通なるが故に、能く普ねく通ずべし。普ねく通ずるが故に、偏よりて適する所ろあらざるべし。之れ、普通の普通たる所以にして、即はち、普通教育の眞旨義にあらずや。

左れば、普通教育の卒業生を目して、直ちに婚嫁の準備了れりと認むるがごときは、大早計の誤謬となす。普通教育の能く教育し得たる所ろは、即はち普通一汎の開發これ也。嫁して、家を理し、子を擧げて、之が母となる迄には、更に一二年の專門教育なかる可らず、之れ、女性に於ては、個々の家庭に於て、實地に修業すべき所ろのものとす。故に、此の專門教育を卒業せざるに先ちては、未だ專門の業に入ることを得

べき資格なきものと認めざる可らず。

然るに、古風の女子教育なるものは、家に於て、覺束なき普通教育を施こし、之に引つゞきて、專門教育を施こし、以て、婚嫁の準備を得せしむ。齊家の大躰と、育兒に關する多少の智識とは、如此くして得せしめられたり。固より、其の智識の寥々として貧しきとは、言ふ迄もなしと雖とも、婚嫁に先だちて、時世相應の教育を受け、一と通りの順序を履みたるの一事は、則はち恕して可認せざるを得ず。

之に反し、近時の文明教育を受くるものは、開化の世の整備せる教育順序に隨ひて、先づ、幼年教育を小學校に於て了え、次に普通教育（中等教育）を女學校に於て了え、將に之より專門的修業に移らんとせるに當りて（則はち、未だ此の修業を受けざるに當りて）、一躍、直ちに專門の業に入る。左れば初歩に於ては、古風の教育に優りたる完全なる順序を履みたりと雖ども、修業に於ては、古風の習慣にもなかりしほどの突飛を爲し。未だ何等の經驗もなくして、直ちに、齊家育兒の大事業を擔當するものとなる。其誤りと弊害とは、寧ろ如此き片環なる文明教育に於て多きを見る。完きを求めて全からざるは、少こしく求めて之を完ふするに如かず、世の文明的女子教育の結果として、今の如く誤用せられんには、其益は反つて昔時のものに劣らん也。

此の謬元の主なるものは、普通教育の眞意義を辨知せざるによる。普通教育の意義を知らざるは、即はち、教育そのものの眞誠の大希望を辨ぜざるに基ゐす。

茲にまことに、女生の普通教育を發揮し、其眞價値を分明にするは、女子教育の爲めの方今の最大急務也。女性に對する正當の尊重は、隨つて之より起らん哉。

職業教育。職業的教育

文に偏したる女子教育の反動として。實益を希がふ世間の流行として。前文部大臣の摯實なる奬勵の餘響として。今や、女子職業教育なるもの、將に隆んに行はれんとす。

吾黨、一と度びは之を祝し、更ためては、之に不審し、茲に流行を逭はんとする被教育者の爲に、敢て一言を寄せざるを得ず。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

夫れ、今の所云る女子職業教育なるものを受けんとするの諸子は、其の職業としての教育を受けんが爲めに之に學ぶか、もしくは、其の普通教育に於いて職業的の分子多きが爲めにして之に學ぶか、切言すれば、其の望む所は、職業教育にある乎、又は、職業的教育にある乎。

職業教育と、職業的教育とは、少しく似て大いに異なる。職業教育なるものは、世に處し身を立つるの職業として之を施こすにあり、即はち是れ一の專門教育也。職業的教育なるものは、普通教育に於て職業の要素を多くし、特に勤儉勞働の習養を旨として、人に職業を重んずるの精神と、之を好むの趣味と、之に耐ゆるの習慣とを與へんとを要とする也。故に、職業教育の卒業者は、直ちに職業に就くとを得べし。職業的教育の卒業者は、單に、職業に對するの好傾向を得るに留まるべし。二者の期する所、初めより、相異なるが故に、與ふる所の最後の結果は、固より分明に相違せざる可らず。

而して、我國方今の社會に於ては、手工的の職業を學ばんが爲には、之を學校組織の所に於てする時は、大抵、効益少し。寧ろ、之を專門の職工に就きて學び、所云る、弟子入をして、古風の修業を爲すには及かじ。即はち、裁縫の爲めには仕立屋に學び、洋服の爲めには、洋服屋に弟子入するを以て、最良とす。之を所云る學校組織の所に於てするは、躰裁太はだ文明開化の修業の如くにして、實は効益の少なきとを發見せん也。故に、今の所云る女子職業學校なるものに學び、三四年の星霜を經て玆に卒業の榮を荷ふとも、之を實地の職業として用ひんとき、遂には古風從來の世の職人に敵するとは能はざると、喩へば、經濟學校の卒業生が、致富實用の技倆に於て、商界の實地に辛苦經歷したる所云る無學者の商人に及ばざるが如けん。

世間近年、男子の爲にも職工學校なるものゝ連りに設けらるるを見る。もし、此學校の期望する所にして、實地の職人を養成するにありとせば、蓋し惟ふに其の卒業者の前途は不運を以て見舞はるゝの外あらざるべし。職人としての教育の爲には、今の學校組織の教育は、餘りに開化風、餘りに學者風なれば也。左れど、此等男子の爲の職工學校の卒業生は、直ちに職工たらんよりも、職工中の伍長の如きものとなるべき機會多からんか。果して然らんには、火にもあらず水にもあ

らぬ中間曖昧のどちら付かずの教育として恰好なり。惟ふに、職工學校の卒業生は、詮ずる所、此所に究極せんか。去らば、必らずしも、其の卒業生の前途の爲めに憂ふべきにあらずとするも、如此き職工伍長を多く需要すべき程の大職事の連りに起らざる間は、遂に暫らく不遇の歎なきを得ざるべし。此時に當つては、有學の職工は、寧ろ無學の職工よりも劣れる也。文明教育の禍とは、即はち此類也。

然るに、女子職業學校の卒業生の爲めには、此の偶然の救濟もあるべからず。即はち、彼等には、職工女中の伍長となるべき場合の絶無なるとを如何せん。何となれば、彼等が從事する職業は、伍長の如き取締人を要すべきものにあらざるが故なり。

去らば、女子職業學校の目的とする所、假りに職業教育にありとせば、其の卒業生の前途察すべき也。惟ふに、其の目的とする所は、寧ろ職業的女子教育にあらずんばあらず。これ、眞に適當の計畫なれば也。左れど、近來起り來る所々の女子職業學校なるものを視察するに、其の目的とする所、二途の間に彷徨し、何れを是と確定せざるが如し。俗に、帶の爲め

にせば短く、襷の爲めにせば、長しとは、即はち此の謂ひ也。彼等にして、若し斷然、職業教育の爲にすとせば、太いに其の學風を改ため、倘且つ年限を長くせざる可らず。若し亦た職業的教育の爲にすとせば、更に多く普通學科の分子を增加せざる可らず。然らずして、此如く二途の間に彷徨せば、たとひ現在一時の流行に適應して、恰かも能く彼教育者の曖昧なる需要に合ふとを得るとも、馬脚久しからずして露はれ、教育の結果、過度に擯斥せられ、遂に職業教育の名を汚して、一癈再たび起つと能はざるの悲境に陷ゐらんと明々白々の運たり。

玆に彼教育者の曖昧なる需要と言へり。何んとなれば、今の女子職業學校に入るものは、必らずしも、職業教育を受けて立身の職業を實地に習得せんと欲するものにはあらず、見よ良家の子女にして毫も如此き意思なきものが多く入學し來るにはあらずや。左りとて、彼等は、普通教育を受けんが爲に來り學ぶにもあらず。妙味、半睡半醒の間だにありとて、彼等は、不問不言の内に、意味なく此處に來り學ぶもの也。父兄は曰く、女は多少、手工を知るを可とすと。彼等は、多少

知るヿを要すべきもの、為に、必らず受けざる可らざるの教育の他に存するヿを忘れたる也。何んとなれば、これ、遠大の關係にして、目前卑近の結果を奏すべきものにあらざれば也。子女は曰く、もし職業を覺え置かば、万一の時の自立の方法たるべしと。而して、彼等は、かゝる半途の職業教育が、職業として自活するを助くるには殆んど効能なきヿを辨知せざる也。嗚呼、万一の為と多少との為に、普通教育を廢す、恨事にあらずや。加之、父兄も、子女も、此如く、二人の主に兼ね仕へ、敵味方に兩股をかくるが如き所存にて、初めより曖昧の撰擇を為せり。嗚呼、これ他日何れをも取こと能はざる二方の兩損を招くべき由緣にはあらずや。

左れば、今の女子職業學校の隆盛は、一時の現象に過ぎず。之に走らんとする女生の好みも、一時の流行に過ぎず。久しからずして、當然の結果、露白し、事物は、自然の正則に反るべし。之を是れ知らずして、一と時の春に醉はんとするものの多きこそ、悲しけれ。

故に、吾黨は、明らかに宣言す。吾黨は、女子の為の職業教育、及び、職業的教育の二つ乍らを共に切要なりと知る。故に、明白に之を區別するヿの切要なるを辨ず。而して、職業教育の為には、寧ろ學校組織を取らずして、古風の師匠弟子の關係を好しとし、もし之を學校組織にせば、其の編成を一新せざる可らざるヿを知る。之を以て、今の女子職業學校は、寧ろ職業的教育たるの目的を擇び、更に普通教育の要素を增加し、特に、儉勤、勞働、職業を重んずるの習慣等を多くしたる普通教育として、隆んに施行するヿの、自然、又恰當なるヿを信ず、と。

評論

無意識論

健康の人は、躰あるヿを忘る、之あるヿを覺るの日は、則はち、病あるの日なり。生者、生を忘る、安くんぞ亦た死を念はんや。一片、茶毘の煙、消てゆく前途をかくし、半ば散る、草頭の露に涙を知りそめて、初めて幽明の隔たりを覺る。游子の家を懷ふは、家を去れるが為め也。忠良の民といへど

も、國危ふからずして、如何んぞ、愛國の名を聞かんや。仁者、仁を忘れ、義人、義を忘れて、大仁大義、初めて在り。拘々、曉々として、仁義の名を叫ぶの時や、道危ふい哉。古しへの老哲仙は曰く、仁義、亡びざれば、大盜、止まずと。蘇國の傑士亦た歎じて曰へらく、願はくは、無意識の世に反へさん哉と。嗚呼、人世、何んぞ屢ば智慧の故によりて墮落するヿを爲すや。

白水、遠く流れて、其の流るゝヿを自から知るヿなし。百花、春に裝ほひて、其の裝ほひを自から識るヿなし。雲雀、高く天に歌へども、歌の聲を自から賞めず。胡蝶、翩翻として、昆虫これを羨やめども、自から其姿を眺めず。山や、泰然として動かず、而も、坐禪の功を説かず。月や、自から盈映す、而も、物の哀れを語らず。大空の量、宏ろき哉。無邊にして、限りなき哉、万化千變の通、自在なる哉、青碧にして、深ひ哉、淡如として、清ひ哉、左れど、大空は、遂に自から誇るヿなし。洋海の水、其の多きヿを負まず、常に天雨を受く。巨艦大船を乗せて、重きに耐ゆるを語らず、白波互ひに相ひそめく耳。嗚呼、自然界の諸氏、何んぞ、其の玄默にして、自忘するヿの至れるや。

余は、幼な兒を聖なりとす。其の談ずるや、意味なきほどに意義なし。其の遊ぶや、遊ぶヿを忘るゝほどに遊ぶ。乍ち泣て、泣くヿを忘れ、忽まち鬪かつて、鬪かふヿを忘る。自から邪氣を感ぜざるが故に、無邪氣なり。自から生存の苦を知らざるが故に、能く成育す。其の眠る時の、如何に好く眠るや。其の食ふ時の、如何に善く食ふや。彼等は、其の大いに學びつゝあるヿを知らず。彼等は、其の大いに説敎しつゝあるヿを識らず。彼等は、其の大いに慰さめつゝあるヿを覺らず。彼等が爲めに、憂ふるものあり、喜こぶものあり、夜も寢ねざるほどに思ふものありといへども、彼等は之を知らず。知らざるが故に、能く如斯く人を動かすヿをも亦自から知るヿなし。彼等は、更めて、天地を樂しとも言はず、されど、其樂しみつゝあるヿは明白なり。誰か、彼等を害するヿを得ん。誰か、彼等を苦しむるヿを得ん。誰か、彼等に敵するヿを得ん。彼等が、眞に幼な兒たるの間、天下は擧つて之を愛敬せん也。

彼の巧妙なる樂人が樂を奏するを見る。双手、自づから動き

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

十指、各々躍る。「右の手は、左の手の爲す所を知らず」。一つの指は、他の指の爲す所を知らず。樂人、何んぞ亦た、自から知らんや。渠が五躰は、波動せり。彼が双手は、奔走せり。彼が十指は、飛躍せり。而して、彼等は、皆な自から動きて、互ひに相知らざる也。斯くして、嘹々、奏々の妙へなる美音、ふし毎に起り、起りつゝ相調のふ。此に於てか、一曲の樂すなはち成り、万籟、聲をひそめ、全地、靜まり、天の使も、暫らく琴の手を止む。夫れ、巧妙の樂は、自から識らざるの時に成るもの也。

堯舜の民は、帝徳を知らず。團欒の家は、理義を說かず。歡樂の極まる所、手の舞ひ、足の踏むとを悟らず。熱情の激する所、身の焼け、五躰の裂かるゝとを覺へず。蓋し、人事、こゝに至つて、究極せりと言つべし。人事の究極するは、巖石の割るゝが如し。穿入して、水源に達し、自然の流、混々然として此所より湧出せば、人事は、既に其の妙地に至れる也。妙地は、神仙の座する所、聖氣自から發す、靈能、自から動く。此に於てか、不覺の覺あり、不動の動あり、無聲の聲あり、無形の形あり。大いに愚なるが如くして、大賢なり。大いに痴なるが如くして、大聰なり。大いに成さゞるが如くして、大有爲也。之れを、無意識の聖界と云ふ。蓋し、無意識は、大有意識の聖殿、更らに一歩奥ふかき所の靈現なり。

嗚呼、ざわ〳〵しき世の樣かな。四方の民草、躍り立ち、四方の心海、騷ぎ立つ。議論の聲は、暴風より物すごく、理窟の穿鑿は地獄より底ふかし。滔々たる能辯の人の多き哉、鑿々たる哲理の人の多き哉。人生の過半は、辯舌の爲めに動き、言語と云ふもの獨り世話し氣なり。人情は、何處の陰にかくれけん。信仰は、何處の谷にひそみけん。社界は、貧血症となりつるか、何んぞ、其血の少なきや。人の數は、增しつるに、友の數は減じたる乎。親と子と、夫と妻と、兄と弟との關はりは、彌よ遠きに、人口は益々增殖する乎。天下、皆な賢こくして、痴態なし。組織、整然として、矛盾なし。如何に、人事のすじつまの甘く合ひ、物事のきちやうめんに整理する哉。頌德表、歡迎の辭、何々會、何々の文、皆な、明白の告白を爲して、世は內環の恥ぢろひを懶うしとせり。世界は、至つて便利となれり。左れど、如此く能辯に、如此く利

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

巧に、如此く組織的に、如此く神經質に、世は彌よ多忙となりて、而して、日本人民は、果して、成育しつゝある乎、壽命は長引きつゝある乎。心にかゝるは、此の事也。

慕はしき哉、無意識の人。希はくは、大いに忘るゝヿを得て、大いに愚となるヿを得ん。近時、切りに記憶術の發明せらるるを聞く、何んぞ忘るゝの術を創起するの人なきや。世人は評す、支那人は、無神經なりと、吾黨は少しく無神經に近づかんヿを多とす。忘なる哉、愚なる哉、無神經なる哉、無意識なる哉。吾黨は、寧ろ、此の反面の妙味を味はんヿを同胞に勸めなん。

望月峯吉君

巖本善治

望月峯吉君は、職任を重んじ、責務に倒るゝの人なりき。其兵役にあるや、軍曹たり。深く同輩に推重せられ、大率ね會計の任に當りぬ。其の廉潔にして、周密なるが爲め也。去年晩春、期滿ちて、兵役より免ぜらるゝや、市外王子村の傳道に從事す。君、傳道の爲に別見識あり。身を以て實行を躰し、事業を以て、無聲の宣傳を爲さんと欲し、密かに全村教育の慨あり。則はち、屋外に札を懸けて、無月謝教授を廣告す。主として、貧兒を敎え、傍ら村人の爲めに、書狀を認ため、もしくは、其の顧問に應ぜんとする也。初め、村人、之を異とし、密かに輕んじて、人を釣るの權畧となす。君、毫も憂ひず。來るものあれば則はち敎え、謀るものあれば則はち諭す、循々として倦むヿを知らざるが如し。漸やくにして、來學するもの次第に加はる。近寺の住僧も亦た詩經の講解を聞かんが爲めに來るに至れり。然るに、君が多年の肺患も亦た漸やく進み、深く憂ふべきの徵候を示すに至れり。時に、召集の令あり、君、豫備役に在るを以ての故に、近衞第一聯隊に應ず。君、慷慨にして寡默、平生多く言はず。然れども、此時、生別の念あり。同寓の人に言ひて曰く、多年、國家の粟を食ひ、陛下の扶持を辱くせしは、則はち此時あらんが爲也、今回まさに身を以て殉ぜんと。則はち、病を強めて出で、殊に撿醫を受けず。兵營に入つて、日々號令す。然れども、聲音次第に枯れ、呼吸漸やく迫る、實に大患に近づく也。友人、則はち極諫し、遂に醫の診斷を受けしめて、除隊せ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らるゝに至る。村に歸りて、半ば攝養し、半ば敎授するに、意氣、更に昂揚するものゝ如し。友人、屢ば諫止すれども、遂に可かず、倒れて後ち止まんとする也。今年春、北里醫博の診斷を受くるに及んで、稍や謹重の心あり、然れども、時機既に後れたりき。五月、家兄に伴はれて、鄕里靜岡縣松野村に還る。治療遂に効なく、六月五日永眠す。君が王子村を去らんとする頃、一日、枕頭の花瓶に注目し、一蕾の未だ開かずして稍や萎れたるに顧りみ、傍者に言ひて曰く、請ふ、かの蕾を摘去せよ、未だ開かずして萎るゝの花こそ哀れなれと。此言、遂に讖を爲し、君は未だ開かずして逝けり。君が鄕里に還るや、人、多く憂ひとなす。余は、獨り慰さめて曰く、如此き貞士、未だ決して死せずと。此の言を以て、家人に保證し、亦自から强ふしたるに、今や則はち如此し。嗚呼、潔白、義烈の士、望月君。余は、君が爲に歎惜する所のもの多し。然れども、君が一歲の熱血は、既に根柢に入れり。君に學びたるもの、四十人、大率ね、君が精神の一斑を窺がひたり。初めや、君に來學するものを止めたる小學校長は、君去るの後ち、郡長が二見を君に委賴せんとして、代つて來り訪ふとありき。見玉へ、君が傳道は、既に其の端緖を開き、其生命は地に播かれたり。惟ふに、決して亡びざるなり。君、些さか、慰さむる所あるとを得ん。廉潔にして、義、慷慨にして、斷、忠實にして、知己に酬ゆるは、君が生命なりき。此の生命、決して失せじ。余が輩は、到底、君を忘るゝと能はざる也。

國家敎育の名に惑ふ

國家敎育の名を聞くと、久し。國家敎育の實たるもの、果して何ものぞ。

國家敎育とは、『國家』の觀念を養成し、國家の爲に獻牲する心力を訓練するの謂ひか。左らば、近世、此回の戰爭の如く、甚大に有効に、國家敎育を施こし得たるものはあらざるべし。國家敎育とは、抑そも斯の如き者の謂ひ乎。

苟くも然らば、戰爭は敎育なり、將軍は敎育者なり。若し夫れ、樽俎折衝の機、國民項を延べて憂思冲々たるの時、一言以て能く國榮を外交に煥發せしむるの外交家あらば、渠は即

はち國家的一大教育者にあらずや。

斯の如く國家教育を解し來れば、國家教育とは、國民教育なり、社會観上の一般教育なり。其の手段なる、一代の風雲を捲き起し、一世の輿論を召び攪まし、國民をして國家を思はしむるに足るべき一大事變を勃起せしむるに若くはなし。果して然らば、尋常朴々の教師其人の如き、寧ろ之が爲に効力あること淺し。一世の豫言者は、彼に優る。一代の雄辯家は、彼に優る。万衆の目を惹くことを得べき新聞記者は、彼に優る。國榮を双肩に荷ふべき政治家は、彼に優る。則はち、尋常普通の所云る教育者たるものは、遂に國家教育者としての上位に立つこと能はざるべき也。此に於てか、非教育者は、教育者にして、教育者は即はち非教育者たらざるなきか。眞に稱して國家教育者たりと云ふもの丶眞品はこれ歟。

左れど、世上に國家教育の名を聞くこと久しく、而も之を聞くこと、專ぱら專門教育者の間に於てする也。左らば、則はち國家教育者の名を負ふべき者は、彼等なる乎。よし、彼等なりとせん、而も、其の實効を擧ぐる所は、如何の事ぞ。曰く、忠君、愛國。曰く、國家。曰く、國家主義。抑そも、如此き辭題を操返すこと、日に再三ならんとも、兒童の腦裏に影響すべき實効は、毫末もなし。若し在りとせば、必らずや、曲造、不自然の結果なるのみ。兒童の中、能く暗らんじて屢々此等の言辭を誦するの徒は、大率ね、輕佻浮華の輩なり、然らざれば、早熟偏僻の見なり。同もに、健全多望なる自然の愛見にはあらず。

故に、吾黨は、屢ば國家教育の名に惑ふ。隨つて亦た惑ふは、國家教育者たるもの果して誰ぞやと言ふこと、これ也。知らずや、こはこれ今の教育者なりと解するものあらば、彌よ惑はざるを得ず。隆んに之を自負するものあるに及べば、遂に一笑せざるを得ず。

吾黨は、國家教育の意義に對して、更に他の一種の見解あることを覺る。曰く、國家が其の資力を用ひて教育を施こすこと、是也と。

國家教育もし然りとせば、現に行はれつ丶ある國家教育は、帝國大學、高等學校、高等中學校の類、凡そ稱して官立學校と爲すもの丶場に於て今日施行せられつ丶ある所の教育即はち是れ也歟。然らば、關わる所ろ尤とも廣く、施く所ろ尤と

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

も急なるべき普通小學教育に於ける國家が教育なるものは、現に果して如何の状態にありや。

今や、市町村は其の小學教育を擔任せり。蓋し之を國家の名に於て擔當す、稱して、國家教育と言ふも、必らずしも不可なし。然りと雖ども、たゞ之を名に於て不可なしと言ふは可なり。若し夫れ、大いに國家教育の實を擧げ、隆んに普通教育を布及し、國家が其國民を尤とも廣く尤とも公平に教育せんとするの大慈仁を遂げんとするが爲には、方今の制度に恨みなきヿ能はず。假りに切言するヿを許されなば、常に言ふべし、今の小學教育は、貧民の錢を集めて、富民の子の教育費に補助するが如しと。

左らば、國家教育に於けるの意義もし第二解の如しとせば、國家教育は、如今、行はるる所尙太はだ淺き也。

嗚呼、國家教育の眞意義、果して如何ん。久しく、其名を聞きて、未だ其實を見ず。夫れ雲雀の天に鳴くは、たゞ其聲を聞しのみだに、爽快なり。邦家の大事に至つては、其形を見るにあらざれば、則はち安んずるヿを得ざる也。

（二二三）

隨感

○血性論理

短歌往々千万無量の情懷を抱く、時として、數百千言の長歌が叙し盡すヿ能はざるの多情を含む。この時に於ては、短歌は、長歌よりも長し。短歌の長恨は、長歌の長歎よりも長しと言ふべし。言語、亦然り。論理、亦然り。其の血性に屬するものに至つて、特に然るヿを覺ゆ。長談、一血語に若かず。周密なる論理、一涙行に及ばず。こゝに、言外の言、理外の理あり。直ちに、血より血に貫流して、默々、大叫音を聞かしむ。心頭、合點し、情緒、整のひ、血治まり、胸底、確かに悟徹するは、即はち、是れ此時也。

○あやしき看護

幼な兒の夢を驚ろかすものあり。之を視れば、蚤の嚙みつけるにてあり。左るにても心なき惡るものかな、此の愛らしき

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

若兄を思はぬかと。腹だたしさに、指頭にひねる。氣息奄々として横さまに伏したる渠を善く視れば、腹大きやかにして、胎内、何ものかありげなる雌にてありけり。「扨ては、汝も亦た母とならんとするものなり」。指頭に唾を點し、渠に氣付の水を與へ、其のやう〳〵に生かへるに掛念す。

○義捐募集の最始の動元

他に義捐を促がさんとするものは、先づ自から義捐せざるべからず。難じて曰く、貧力なきによつて義捐を促がすなり、先づ自から義捐するの錢なきを何如にせんと。義捐、何んぞ必らずしも、錢のみならんや。たとひ資金なくとも、力なきはあらじ、力なくとも誠なきはあらじ。率先挺身して、一物を献げ、全誠を披瀝して犧牲となす。此に於て乎、其事、神聖となりて天佑下り、一誠、元種となりて幾多の至誠を動かす。如斯して則ち巨万の義捨おる也。須からく觀るべし、義捐雲集の歴史に於て、一二尤とも人を感動せしむるの赤誠、先づ其根底に熱沸するとなきのものありやと。如今、義捐金の少なきにあらず、之を募るに堪るの聖なる動元少なき耳。彼の自からは何の義捐もなさで、偏へに他の動かんことをのみ叫ぶ人ほど、横着なるはあらじと思ふ。

○慈悲あつきの國

我國、義捐の習慣薄しと言ふと莫れ。東西趣むきを異にす、外形によりて斷ずるは、極めて迂なり。本邦の俗、戸内寄寓の人に對する助力の金額は夥しからずや。其性質に就て言はば即はち主たる人の義捐たるもの多し。乞食に施こし、托鉢に献ず、此般殊勝なる心掛は、他邦に曾て有らざる所ろ也。暫らく、社會上の是非を言ふと莫れ、玆には、單に慈悲心の情に就て言はん。此の情や、我邦人の如く濃やかなるものは天下に少なし。蓋し、富に對する義捐力の分割は、世界に於て、吾國をもて第一とせん也。

○古風の家居

余は古風の家居を好む。間口狹く奧行深し、質素にして雅趣に富めり、一見朴として價低きが如く、而も珍貴世に絶するもの滿てり。嗚呼、今人を見て、古人を慕ふ、此感同じ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

爛煥

博士ノースロップ先生

中村茂策

米國教育家中に錚々の聞え高き、博士ノースロップ氏の、先頃我國に來遊せられたることは、諸新聞雜誌の傳ふるによりて、既に世の知る處なり。氏の來らるゝや、官私諸學校は、爭ひて、其演說を請ひ、また西園寺文相、牧野次官等盛に宴を張りて、氏を歡迎せり。氏の單に一私人として來遊せられて如此く歡迎せらるゝこと、亦所以なきに非ず。そは氏の如何なる人物にして、如何なる經歷を有せる人なるかを聞くに於て、明に知ることを得ん。友人中村氏は、博士來遊後頗る其眷顧を受けたる者なり。博士に就いて親しく聞き、また其知友より傳聞するものによりて、氏の小傳一篇を草す。今之を本誌上に載せて、博士の人物經歷を世に紹介す。

櫻井鷗村識。

造化の我日東の美邦を擇んで、天工の大匠を爰に鍾むるや、陸千里を越え、海万里を渡りて、遠く我山川風光の美を求め、勝を探るの外客を誘致すること、年に多きを加ふ。多くは漫游を稱して來り、我を以て地の樂園たるの思ひをなすものあり。未だ我國民の性情に發揮せられたるの秀美を探り、之に學びて且つ敎ふる處あらんが爲に來ること、這般來遊せられたる、我敬愛する博士ノースロップ先生の如きは稀に見る處なり。

先生の來遊せらるゝや、予は頗る其愛顧を蒙り、又屢其垂訓を辱ふす。一日某氏の宅に先生と會談することあり、予は先生に尋ぬるに晃山の勝景を探ること如何を以てせしに、先生徐ろに予に答へて、君何が爲に予の晃山に遊ぶの意向如何を問ふや、曩に京都に滯留せし時、人あり誘ふに南都風光の勝に遊ばんことを以てせしも、予や應ぜざりきといはる。蓋し先生來遊の志、此に非ずして彼に在り、先生は自然界の美觀を愛せらるゝの人、素より我邦山河の秀美なるに思を寄する處なからんや、然れども先生は僅に之が爲に、齡八十年の心懷を舒べんと欲し、單身万里を遠しとせずして、我邦に漫遊せられたるに非ず。嘗て親しく、薰陶敎育せられたる日本青年男女の故鄉を慕ひ、嘗て爲に大に義俠を發せられたる我國を思ひて、其國民を觀んが爲に、先生は來遊せられしなり。予は僅に此一事を以てして、大に先生が人物の非凡なるに敬服す。更に先生が經歷をきくに及びては、欽仰の情禁ずる能はず、殊に先生の我國民に寄せられたる並々ならぬ義俠懇切の至情に對して、予は日本國民の一人として、感謝の念に堪へざるものなり。

先生嘗て親しく予に其少年時代の經歷を語らる。先生は米國一農家の子なり。幼にして倜儻大志あり、頗る學を好んで、一生を田野耕犁の間に沒了せんことを欲せず、大學に入つて螢雪の功を積まんの志深くして、屢父君に懇請せらる所ありしも、父君は農家の兒、學に精しくして、また何の益かあらんと一叱して、先生が鬱勃の志を挫かんとせられしかば、先生

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

また如何ともする能はず、然れども初志沮まず、默して時機の來るを待たれつゝ、試みに一書を某大學の校長に宛て、身に一錢の私財なきより、郵券を貼用せぬまゝにて置郵せしに、其大學校長は頗る先生の篤志なるに感じ、敎育の眞相は徒に學問を敎ふるに非ずして、洵に人物を養成するにあることを懇々切論せる一冊子を送りて先生に與へたり。先生之を讀んで深く感激し、いよ〳〵切に自ら敎育を受けざるべからざるを感じ、またもや無郵券にて、エール大學校長に書を送りたり、エール大學校長も亦大に先生の志しを嘉みし、親切丁寧なる書面を送りて、大に其志を奬勵せり。先生遊學の志ます〳〵禁ずること能はずして、先きの一小冊子と此書簡とを竊に母氏に示されしに、母氏は大學校長等が其兒に懇切なるを見て、喜涙たま〳〵袖を濕し、此兒學ばしむべしと信じ、父君を勸めて先生を大學に學ばしめんことを議られしに、父君も先生の志遂に遏むべからざるを察し、此兒の念頭大學の外亦一物もなしといひつ、先生を許してエール大學に遊ばしめたり。

先生遊學の志やうやく達して、大學に入り拮据勉勵寸暇を怠ることなかりしに、曩には耡犂を執りし身の、俄に勉學に移りしより、就學後一年にして無情なる肺患の侵す所となりつ、友人等は先生の遂に起つべからざるを信じたりしに、先生は飜然として悟る所あり、是れより大に意を體育に用ゐ、胸骼を張りて新鮮なる大氣を吸呼することに頗る注意せられしより、肺患もいつしかに癒へ、今年八十歲の高齡を重ぬるも、鑁鑠老健なること壯者に讓らず。先生自ら語りて、予にしても

し嚮きの日意を躰健に用ゐざりけんには、四十年以前に予は既に泉下の客となりけんものをといはる。この經驗によりて先生は常に書生を敎へ、我國にて所々に演說せられし時にも、屢此事を以て、訓戒を與へられき。

先生學をエール大學に卒へてより、程なくコンテクチカット州政府は先生を擧げて、該州學務監督の職を囑しぬ、職に爰に務むること十一年、マッサチユセット州に轉任して、現今ヂヨンス、ホプキンス大學の校長たる博士ギルマン氏の椅子を襲いで、また爰に學務監督たること十有六年、今や職を辭して閑散の地に在らるゝも、なほ米國敎育界の老將軍として、頗る勢力を有せらる。

先生今日に至るまで社會有益の事業に盡瘁せられしこと三四にして留まらず。學校樹栽日運動の如きは其一なり。一千八百七十二年ネブラスカ州の知事モルトン氏、州の磽确不毛なるを憂ひて、州民と議り、歲に一日樹栽日を定めて、其日には州民みな出でゝ平野及び河畔に樹苗を植うることとなせしに、其結果著大の成功を奏し、今日にては昔し赤裸々たりしネブラスカ州、到る處鬱蒼たる樹林を以て蔽はれ、人口隨て繁殖したり。ノースロップ先生は衞生美術の點より見る處ありて、この樹栽日を學校に行はんと欲し。曾てコンテクチカット州にて開かれたる山林會議に臨席して、之に關するの意見論文を朗讀せられしに、其說到底行ふべきものに非らずとして嘲笑するものもありしかなれど、先生は千八百八十三年より、自ら監督せし兒童等と共に樹栽日を定め、學校園内及び道傍

に樹苗を栽うることを始めしに、意外の好成績を奏し、諸學校も亦續々として之にならふものあるに至りたり。是が爲めに學生をして鄕土を愛し、天然を愛するの情を養成せしむるに功力尠なからずといふ。學校樹栽日は五月の初めつかたにして、其日の午前には兒童等一同學校講堂に集まりつ、敎師の質問に應じて、是迄學びたる樹木の名を繰返し、或は歌を誦し、祝文を讀みつ、午後には兒童等躬ら學校の園內に、道傍に樹苗を栽えて、其樹には兒童自身の名を記して、或はメリーの木と呼び、ゼームスの木と名づく。詩家文人等は大に此等を贊成して、詩を作り、文を草して、此日を祝し、諸學校は此等を集めて小冊子を編むことあり。詩家ブライアントの作に成れる詩『樹栽日の讃美歌』といへるは此等の中にての傑作なりといふ。學校樹栽日に關しては、牧野文部次官の曩にノースロップ先生の意見によりて、師範學校々長會議の席上に演說する處あり。また帝國敎育大會にも之に關する論文を送りて、稍世の注意を惹きたれば、遠からずして我國の學校も亦樹栽日を祝するの時あるべく、之によりて國益を增し、風致を加へ、衞生を助くることを得て、ノースロップ先生に負ふ處尠なからざるに至らん。先生また家屋の雅致を添へ、衞生を助けんが爲に、樹栽日に日本產蔦を植うることを奬勵せられたり。或年の如きはコンチクチカット州の一新聞に廣告して、男女兒童が五月に五本の日本蔦苗を栽えて、八月まで一本も枯るゝことなく滿足に生長せしめたらんには、賞金一弗を拂ふべしと約せられしかば、彼處此處の小童少女等、手に衣に泥を塗りて父母に叱られつゝ、蔦を栽えて、中には賞金を獲たるものも多く、先生が其後數年を出でゝ、該州を巡遊ありし頃には、所々の家屋や垣根に、兒童の手づから栽ゑて、メリーの蔦、ジョンの蔦など名づけたる日本蔦の繁茂生長せるを認められたりとぞ。這般芝白金なる明治學院にては、先生の來遊を紀念せんが爲に、講堂の傍に日本蔦を栽ゑ、之れに『ノースロップ、アイビー』なる名稱を附して、生徒等先生を擁しつゝ、之を栽うるの式を擧げ、なほ之を撮影して、先生に贈りたりといふ。

先生また自ら主唱者となりて、フヒラデルフヒヤ府に貸家會社を起されたり。會社の仕組は多くの家屋を建築して、之を勞働者に貸與し、月賦拂込の方法に由りて、終には其家屋を勞働者の有に歸せしむるものなり。此會社（先生は主唱者たりしも、其會社は先生の名によりて成立するものに非ず）一度び起りてより、同種のもの所々に起るありて、現今此等會社の建築したる家屋は、二十有万戶の多數に達し、百万餘人の勞働者は、幸福なるホームの生活を營むを得るに至りぬ。先生また富豪を勸めて、資財を公益に用ゐさしむることに盡力せられしが、之によりて或は學校を起すものあり、或は公園を設立するものあり、或は黑奴保護の爲に數百万金を擲つものあり、ブルークリン府のプラット氏の如きは、獨力二百万弗の資產を投じて、プラット、インスチユートと稱する一大職工學校を起したり。かゝる結果を奏したる所以のものは、先生の熱心至誠の致す處なりと雖も、亦公益の爲に財を吝まざ

る米國富豪の精神や洵に敬服するに餘りあり。我國の滔々たる金滿家中、誰か亦如此きの美擧あるをきゝて、愧色なきものぞ。況んや一度び貧民學校を起さんと決して、また勘定に合はずとなして、之をやめたる所謂金持なるものさへある世なるに於てをや。

其他先生は風致衞生を慮りて村落改良に力を用ゐ、また州より州を經、市より市に至りて、敎員講習會に講議をなして、敎育の進歩に盡瘁さるゝことは、先生が今の老躰を以てしてなほ毫も怠らるゝことなき處なり。

先生また心を外邦の爲に盡して、大に成す所あり、我國民の如きは、先生の恩義の永く記して忘る可らざるものを有す。我國民は米國政府が馬關償金を返却したる其高義に感ぜり。然るに此償金返却の美擧あるは、實に我ノースロップ先生の熱心之を唱導せられたるに由れるを知らば、豈に先生の義俠心に感謝せざるものあらんや。文久三年長州藩の馬關海峽を通する外國船を砲擊せしや、英佛蘭米の軍艦は舳艫相接して、横濱に來り、威を示して幕府に强請する處ありしより、幕府は四ヶ國に拂ふに三百万兩の償金を以てしたり。其中米國に拂ひたる金額は七十五万兩なり。尤も拂渡しは小判を以てしたる故に、其一兩現今の十圓に相當すると見て、米國は七百五十万圓の多額なる償金を收めたるなり。然るに當時米國政府には、フヒッシュなる人、正に大藏卿の椅子に在りしが、氏は今政府の甘んじて、日本より莫大の償金を收めたりと雖も、後日、必ずや、國民の良心發揮して、其非を悟るに至るとあるべしと信じて、七十五万兩の償金は他の費途に使用するとなくして、國庫に藏し置きたりしに、氏が正義公道の念に基きたる其達觀は誤らずして、ノースロップ先生の償金返還論運動となりき。先生之を輿論に訴へて國會に建白し、國會は辯論討議の末遂に之を可決して、償金に利子を加へて返還し、我國民をして米國民の高義なるに感激せしめぬ。我國政府は其金額を以て横濱に築港するの大工事を興したり。我國民是が爲に永く米國の高義を忘れずんば、ノースロップ先生の義俠なるは、また永く忘るゝを得す、且や彼フヒッシュ氏の外交に正義公道を重んじたるは、實に政治界異數の偉物なりと稱すべく、感嘆に餘りあり。誰かいふ外交に正義なしと、予は其然らざるをフヒッシュ氏に於て見る。ノースロップ先生某日東京靑年會館に津田仙氏と會す。仙氏は昔し幕府の拂方を勸めて、かの償金拂渡の事に預りし人なり。氏の先生に會するや、我は拂ひ君は返したりの語ありたりと、語中我國民が感謝の至情を代表したる無限の情味籠れるの思ひあらしむ。

先生はまた我國敎育制度の完成に預りて大に力あり。曩に故森文部の、未た米國駐劄全權公使たりしや、屢先生の意見を叩いて、敎へを受けたるもの多し。かつ森公使は先生を聘するに我國文部顧問の重任を以てせしも先生は内國に於てなすべきの事業正さに多端なりしが爲めに應ぜられず、自から彼『舊日本談』の著者なるムーレー氏を紹介して、當時の文部卿田中不二麿子の顧問たらしめき。またアモルスト大學の校長

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

クラーク氏を紹介し、クラーク氏は校長在任のまゝに一年間我國に在りて、札幌農學校の基を置きたり。先生はまた我國派遣の米國留學男女學生の最多數の監督の勞を取られ、大山伯爵夫人、瓜生海軍大佐夫人、奈良海軍主計總監其他の人々の如きは先生が多年の薰陶に預りたるものなり。牧野文部次官の如きも留米中、先生より教を受くること、多かりしといふ。

たゞに我國のみならず、清國の當路の人才にして、亦先生の薰陶を受けたるもの多し。今より二十年前、支那政府は一時に百二十名の學生を米國に送りたることありしが、其監督の依賴を受けたるものは、このノースロップ先生なりき。其留學生中には嚮に威海衞海戰の際に我軍の捕虜となりたる、清軍中異數の剛膽男兒禁廷幹氏もありて、氏は既に其頃よりして、衆中に嶄然頭角を露出せし俊髦なりしと先生常に賞嘆して語らる。

先生敬虔の念に富み、德に篤く、義を重んず。其溫雅なる容貌、淸楚なる態度は、優に君子人の風采あり。一度び其謦咳に接して、語を交ゆれば、胸懷自ら調爽たるを覺えしむ。先生演說せらるゝや、快辯風を生じ、かつ滿腔の熱心を傾注せらるゝが故に、聽者一として感激せざるはなし。先生また常にコレッヂの語の『完全に教育せられたる人物は、完全に教育せられたる意志に外ならず』といへるを坐右の箴となして、自ら教育しまた人を教育するの要訣とせらる。かつ書生をして常に之を誦せしめて、修養に益する處あらしむ。吾人また永く此語を誦して、自ら裨益する處あり、併せてノースロップ先生を紀念するの便りとせん。先生八十の齡を以て、獨り遙々万里を渡りて、我國を訪はれ、此處彼處に演說せられて、敢て老軀の勞れを厭はるゝとなく、而も我風光の勝致に、心懷を舒ぶるとなくして、また故國に歸らるゝの日將に邇きに在らんとす。先生希くは天下の爲に老餘の身を自愛せられ、かつ先生が志の如く、四五年を出でゞ、再び我國に來遊せらるゝとありて、吾人また乞ふ教へを受けん。吾人は先生の爲に其健康を祈る。

（六月十五日稿）

首途

輪花

窓に夕日のかげきえて　妻のいのちも暮ちかし
堪へぬ思をおさへつゝ　口にはそれといはれども
涙はあとへわれをひく　戰かちてせの君よ
かへりたまはゞあはれみて　この子をそだてたまへてと
いふこゑさへも末きえぬ　つれなき身にしありにせば
かくまでつらくおもはじを　いつまでかくてあるべきか
國の務はわれをよぶ　などてかくまでよわきかと
われと我身を嘲りて　たちはしつれどさりがたく
關なきものは涙のみ　かくてははてじと身を責めて
門をいづれば山の端に　かたぶきかけし三日月の
かよわき影におくられて　さしてゆくべは義務のみち
たどりゆくべき武夫の　わが身はいまや國のため
君のみためと進むなり　妻よかの世にわれをまて
敵の陣をばうちくだき　鬨あげて倒れなば
踏むべき道はふみたりと　またもいましと語りなむ
とこしへまでもわかれなく

星夜

森愛軒

喧噪を吹き破る中宵喇叭の聲、金剛石の如き星は輝々として中空高く藍色の綾絹に黄金色の雛菊を紋付け、九段坂上凄き夜は闇の翼に乘せられて、苦めるもの悲めるもの、喜べるもの樂しめるものを抱き去り、今は只今一人を見殘して何處ともなく更け行けり。余は柳の影に獨り佇みて沈默に、而も余が幽魂は市と共に眠るが如く靜まりぬ。研き上げたる鏡の如く、淀みなき藍壺の如き城濠の何處よりか立ち昇る凄愴の氣は、何時の間にか空氣の天幕を張りて一面に余が立てる九段坂を蔽ひたり。而して沈默の人影は今は動作なき石像の如く冷かに立ち、凄愴の氣は此癖物を攫み殺さんとて益々迫りぬ

余は此の世の中にて最も悲めるものなり、悲は秩序なきものにして彼も悲し、是も悲し。悲は不規則なる連鎖を造りて來る、故に人の心を亂すものなり。凄愴は最も悲の情緒を呼び醒し、平和靜思を與ふるか然らずんば即ち死を與ふ。

幾多輕薄の兒をして走らしめし九段坂は、今は神の聖殿となり、幾多僞善の徒をして肌に吹かしめし軟風は、今は聖き祭物となれり。然れども今立てる余が胸間の惡鬼は汝の固き礎に積み立てられてある如く、幾多の頑固なる罪惡を積み立つるなり。新鮮なる軟風吹けよ、東より西に、而して西より東に、新しき薫を以て腐りたる臭氣に換へよ、然れども余が胸中の悲は汝か清め得る處にあらざらん。

眼を開て高く九天を望めば、綠りなる水晶の如き天の一面に、金剛石の如き群星は輝けり。清く澄み透りたる空氣は永遠にまで安靜の坐に導き、香しき新鮮なる軟風は此安靜なる坐より吹き來り、極より極にまで引かれたる琴線に觸れて無聲の音をなす。此坐や永久安靜の坐なり、此風や永久生命の呼吸なり、此音や清明なる天使の福音なり。逝かなんかな、塵界を解脱して高く羽化せんには。

水晶藍裏寸毫の塵を盛る可からず、況や神聖なる水晶の宮殿をや。泥中の蓮開ては泥濁に染ます、何んぞ況や凋落して再び泥土に葬るに忍びんや。生きて而も濁流に投ぜんよりは、寧ろ肉を死したる者に葬らしめて獨り永久に大靈泉に渇を醫せんかな、嗚呼逝かなんかな。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

山水の影

流水庵

心の憂れひを拂はんとて春のあはれを訪て萬山水白き邊に入り歸來黃塵ふかき處僅に其の面影をつたなき一詩に留む春眠に杳として去りぬと雖も情思猶ほ今に盡きず此に聊かその感を忍ぶ

出立

やさしき人の　琴の音に
春のこゝろを　知りしより
夢おもしろき　わが胸は
夜なく／＼　きゝぬ　花の聲

さあれうつろふ　世のうらみ
風にうたれて　ちるなみだ
かの聲きかず　なりしより
歌もうたはず　なりてけり

わが身生れて　罪知らず
歌ひ／＼て　生ひにしを
などかく忍ぶ　こゝろぞも
思はぬ昔の　羨らやまし

いで今ごろは　春の暮
旅の衣を　つくろひて
ちりゆく花を　袖に受け
名殘を忍ばし　吊らはん

世におそろしき　人の塵
流るゝ水に　耳あらひ
峰の嵐に　衣はらひ
仙人の國に　遊びてん

思へばこゝろの　いそぐ旅
別れをつぐる　人もなく
柴の戸たちて　出でゆけば
露踏む風に　衣輕ろし

山の朝

そよ吹く風の　心地よく
歩むともなく　越えて來ぬ
忍ばしは此處に　やすらひて
殘こせる世をば　かへり見ん

をなたに素絹の　帶ひくは
わが村流るゝ　川ならん
かなたに縞を　織りなすは
なたれの花と　夢ならん

かすみを出づる　村や村
海に浴びぬる　島のごと
わが立つ岩に　ひれ伏して
われを王よと　あがむなれ

たつ足もとに　朝ぎりや
われを埋めて　散る花の
頭かざりて　冠着せ
まことの王よと　ほむるなれ

見ろには靑き　雲の峰
聞くには白き　水の聲
旭に淸き　色みせて
路邊に草の　露忍げし

人なき國に　遊び來て
人にもあらぬ　心地しつ
胸のつゝみを　かぞふれば
神の御聲ぞ　さゝやける

思はず一と聲　世の外に
かすみの中ゆ　呼ばはれば
月よび吼ゆる　獅子のごと
谷はくだけて　山ぞ鳴る

あな貴しの　自然界
世には芥の　われながら
此處には鳥も　路おくり
風も思ひを　洗ふなり

今一とたびの　見をさめに
世のあはれさを　かへり見ん
塵よりほそき　かの村に
塵よりほそく　住むや誰れ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

花も心の　ある深山
かすみを呑みて　露に臥す
今ぞ澄みぬる　こゝろをば
流るゝ水に　映してん

山中

見上げし山を　越えて來つ
見上ぐる山を　越えてゆく
旅のつかれも　岩清水
掬すべば峯の　風すゞし
こへ來し方を　ながむれば
遠方の村々　水長く
かすみ隔てゝ　人遠し

山又山を　背に擔ひ
山又山を　胸に抱く
青葉がかげは　溪を染め
崖には藤の　花ゆかし

すみたる空には　山鷹の
此處をわが世と　ほこりがに
いと勇ましく　かけるなり
千仞の底には　やさしくも
谿をわたるか　鶯の
春の老ゆるを　知らざらん

あはれわれ
此の山里に　尋ね來て
路邊ににほふ　すみれ花
それさへ見るも　恥づかしや
風しみわたる　塵の世の
たゞかりそめの　榮華を戀ひ
夢にも知らぬ　山水の
神をたゝへぬ　故やある

なりもし得なば　此のまゝに
たゞ一もとの　杉の木と
なりなんものを　さあらずば
岩むす苔と　なりてだに
限りもあらぬ　天然の
その一片と　なりなんを
人と生れて　いま此處に
自然の神に　召されつゝ
たづね／＼て　行きくらす
われは幸福よき　ものなりき

彼方の奥の　山を見よ
白雲遠く　たなびけり
彼方の里の　家を見よ
にはとり幽かに　ゑば啼けり
いざやいざ
わが一ともとの　杖曳きて
山又山　水又水
興わくまゝに　探りゆき
盡きぬ自然を　樂しまん

巨岩

かはらぬみさをを　昔に見せ
幾千代經にけん　溪の岩
上には松の　色ふかく
下にはすみれの　花ゆかし
松とすみれと　はた岩と
溪に姿の　水鏡
ふかき風情の　ありげなり
ゆかしさ堪へずや　ありぬらん
塵にまみれし　身も分かで
われもかなたに　立ちよれば
峯の嵐に　波ゆるぎ
松とすみれと　はた岩と
ともに見へ得ず　なりてけり

うぐひす

聞く人の
ありとも知らで　啼く鶯よ
つれ／＼ならぬ　わが爲に
汝が谿出でゝ　此の枝に
いま一とふしを　歌へかし

散る花の
心も知らで　ゆきにしを
春におくれて　啼きくらし
聲をかぎりに　花戀ふは
弔むらふための　汝が歌か

すてられて
世にめづらしき　汝が歌の
まことを聞けば　いとせちに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

涙にくれて　さめも得ず
わがうえにしも　あられども
されど朋(とも)
たのまぬものは　花と人
思ひはつれに　まつわれど
花と人とは　春の夢
さめてのあわれは　盡きざらん

散る花

都の塵ゆ　のがれ來て
心もなげに　溪川の
散る花のせて　ゆら／＼と
流るゝさまを　見おくれば
世にも知られぬ　歌人の
歌ひ／＼て　香もとめず
野寺の鐘に　おくられて
失せぬるごとき　心地して
あわれを思ふ　わが身には
のがれ行くえに　春寒し

山翁

志ばしは此處(こゝ)に　やすらひて
深山のこゝろを　語れがし
やよ、やまかつよ　山里は
流るゝ水や　峯の風
散る花とても　ちるまゝに
こゝろにかゝる　ものもなく
樂しさのみぞ　滿ちぬらん

朝は窓邊に　うぐひすの
來啼ける歌に　おもしろき
夢よりさめて　夜はまた
山田の月の　ほとゝぎす
すめる心を　啼く聲に
聞くともなしに　自(おの)づから
世のあわれさを　知らざらん

汝れが姿の　すこやかに
まめなる見れば　天然の
神や宿りぞ　志ますらん
その斧われに　さらせがし
老ひても山に　ゆき暮らし
うたひて木こる　罪もなき
翁にわれも　なりてまし

わが身さちなく　塵深かき
都の人と　うまれ出で
世におそろしき　人々の
顔をし見るも　倦みぬれば
山路ゆかしく　笑む花の
きよき心を　問はんとて
願ひしまゝに　尋ねきぬ

まだ肌なれぬ　旅衣
はやも惠みの　露ぬれつ
仙人(ひじり)の國に　遊ぶごと
まつわる憂きを　脱がれしが
飛ぶ鳥見ても　花見ても

猶は忘すられぬ　我があわれ
消(け)ぬべき術(すべ)を　教へがし

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翁はほゝえみ　聞き居しが
落葉はたきて　やがて後(のち)
やよ旅人よ　きゝれかし
われ山里に　世を忘れ
鳥やけものと　遊べども
もゆる青葉も　やがて散る
われも常には　幸(さち)福あらじ

風のみかよふ　此の里に
葛葉かきよせ　椎ひろひ
飢もかわきも　知らずして
いとなむ業も　志づやかに
溪の小河の　さら／＼と
流れ／＼て　ゆくめれど
さてその行くえは　何處(いづこ)ぞや

われも昔は　里の花
いとしき妻も　もちにしが
咲くまもあらぬ　山さくら
ちりにし跡は　春の雨
涙にくれて　我れひとり
行くえも知らで　迷ふ蝶
たのめるものは　斧一つ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

われもいつぞと　思えしが
暮らせば忘るゝ　時の恩
老ひても人に　たよらずて
猶ほながらゆる　わがいのち
今はこゝろも　いさ安し
やよ旅人よ　世の幸福は
こゝろ一つに　かはるなり

たさひ山路を　踏みわけて
千山萬水　渡るさも
心のあわれを　拂らはずば
面白ろかるまじ　水の歌
樂しかるまじ　山の色
年はもゆかぬ　君なれば
君こそ幸福や　多からん

さあれ心ありての　君の旅
路のしほりを　いたしなん
彼の白雲は　山高し
彼の溪底は　水深し
たゞ一さすぢの　道越へて
山寺たづれ　行きたまへ
浮世の外は　われ知らず

* * * * * * * *

いざさて翁は　立ちあがり
「今は暇を　たまへがし」
負ひつゝ斧を　肩に負ひ

たちゆく跡を　見おくれば
霞に姿　消えゆきて
わが立つ岩に　風白し

山路夕陽

杖曳きさめて　深山路に
夕日を志ばし　見おくれば
黄金を流す　溪川に
わが影長く　畫かれぬ
頭のあたりゆ　光りさし
足のもさには　紋湧けり
貴ふさき人の　心地しつ
わが影おがみ　ひれ伏して
祈れば木の葉に　風そよぎ
さわ〳〵響く　音のうちに
ゆかしきこさの　思はれぬ
神ぞ歩みや　志ますらん

山寺

なれぬ山路に　ゆきくれて
老木の小路　たどりつゝ
たゞさへ凄き　山寺に
一夜の宿を　請ひぞ得て
主僧さ向ひ　爐邊に
薪おりそへ　世の外の
清き心を　語らへば
阿彌陀の燈　おぼつかに
ふたりの影を　映つしける

暫し話の　糸絶へつ
窓打つ風に　おごろきて
こさば途切れし　間にきけば
墓場の方に　梟の
身にしむばかり　訴へて
ささらぬ我れを　責むるなり
主僧の方を　見かえれば
沈める顔に　呼吸ふかく
口の中にて　いくたびも
南無阿彌陀佛を　唱へける

まこさ浮世は　山いくつ
水いくつ　渡るさも
心にさめて　あるからは
のがるゝ里は　あらざらん
我れを泣かする　花の色
我れを傷むる　聲の音
此處にもあわれは　殘りけり
今ぞ知りぬる　世の中は
心にうつる　影なれや
憂さを忘れぬ　わが身には
白雲深き　此の里も
浮世の外には　なかりけり
いざや歸らん　歸りなん
あわれ忘れて　また來なん。

美觀、廢娼論

花影子

暮れゆく春の名殘をしく弟はなにとなく物悲しく彼感候に加へて人生の悲事屢〻目耳に觸れ弟は遣方なき思に苦むと少からす候。

昨夏の事なりき小弟一日散步の歸途或る家の前に來かゝりし時其家の娘にやあらん齡は廿四五位にして風は女學生とも見ゆべき樣なれども其容貌を一見して其然らざるを知り得たり蒼白にして一種異りたる滑光を有し若き婦人に普通なる眼の凉し味なくどんもりとして何となく活氣なく顏色一點の愛すべき處を見出し得ず唯さつこき樣な物淋しき樣な風姿、弟は思はず娼婦にあらずやと考へつきぬ彼は今水を汲て歸りし者の如くなりしが襷を掛しまゝ箒を手にして出で來り家の前なる往來を掃き始めたる處へ彼の弟なるべしと思はるゝ一青年出來りて彼と語りつゝ笑ひ居りしが其時の彼が笑少しも彼の若き婦人に普通なる樂げなる處なく弟をして一種の悲を感ぜしめたり弟は其青年を知り居しも未だ此婦人を知らざりき故に弟は彼青年に禮して歸りしが後日人に尋ねて果して弟の推察の悲くも誤まらざりしを知り得たり彼女は彼青年の姉にして家貧しく老ひたる父は一家を養ひがたく遂に彼の女を新潟のある方へ遣りて娼妓となしたりしが貧にして救出し得ずして昨年に至りしに北海道の或人に身請せられて彼の地へ行く前に其父弟に逢はんとて來りし者なりし由此外是れより一層哀なるを見得たれども弟に救ふの道なければ如何ともしがたく唯社會の良心の鈍れたるを遺憾に思ひ居るのみに候。

弟は現今多數の人に日々面を合す職を爲しつゝあるに時々彼の歌妓などの來る時何時も弟が心を苦め申候自から好で其境に入りし者すら猶其家庭と境遇との罪少からず況や不完全なる社會の壓制に依りて沈淪せるものに至りては誠に悲歎の極と考へられ候此頃深く罪惡に如何程沈める人にも必ず神より出でし本性の殘り居るを感ずると共に愈々彼の哀なる姉妹等の爲に感ずると深く相成候同き靈性を與へられながら境遇の鐵鎖に縛せられて心になき罪過を犯は是人世の極悲と被存候

詩人クラッピーが村落の詩中に

Cast by fortunfortune on a frowning coast,

と憫み冷かなる慈善に滿足せずして詩人が畫く如くに畫かず

眞理の記するが如くに記すといひしも思起されて小弟は自己に彼の如き詩才なく亦ユゴーやドストイエフスキーの靈筆なきを憾み申候さはれ弟が能ふだけの力を盡して社會の同情に訴へんと期し居り候我等クリスチヤンが妄に彼の哀なる姉妹等を悪魔などゝ呼ぶは實に心なきの極と思はれ候若し一度胸に手を置きて彼等を自己の姉なりと思ひ妹なりと考ひなば如何に感ずべきぞ然るに我等は冷にも彼等を罵り散らして少しも彼等の爲に一夕の祈をもなすを思はず廢娼論などを稱ふるも多くは冷なる道德論より割り出したる議論か然らざれば外國に對する名譽か亦は我等靑年の風儀を保護せんが爲のみ夫故存娼論など生じ來りて水掛論とならんとす是れ小弟が遺憾に思ふ處に候小弟は直に人情に訴へて社會の眞心に逼らんとを望み居り候人は如何なる境界にあるも人なり彼等も彼等相應の道義を有し居れり是實に小弟の同情を起す原因に御坐候彼等の間に有し居る此道義は一方よりいへば眞心の誤りたる働のみ彼等の內自己の汚れ居るをも忘れて情人に對して操を立つるなどゝ思ふ者あるを聞度に弟は此處にも亦人性の自然の隱れ居るを感じ壓搾せられたる眞心の誤りたる働を認めて

哀にもありいぢらしくもあり益々弟等は彼等を憫むで貞節を守らざる可らざるを感じ候嘗て逍遙子の筆になりし天ノ網島の評釋を讀みし時も深く此事を感じ申候弟は此事に就て感ずるの餘激烈なる情に驅られて一篇の敍事文を作り申したれど餘りに激騰したる爲か危險なる思想充滿するやの感あり爲に今日に至る迄(三月頃に書きし者に候)其儘になし置き候へしも弟は充分熟考して一部の小說躰の者となし危險なる處は熟考の上如何にか致して社會に訴へんと存居候不肖筆拙くして思ふ處の十分が一も盡し得ず殘念に存候。

唯今不圖讀賣新聞上に喜ぶ可き一報を見申候或る女敎師の發企によりかゝる不幸に沈淪せんとする姉妹等を救ふ爲に慈善學校を設くるとの義此女敎師とは若し彼の嘗て同志社女學校に在りしバミリー女史にはあらざるか何にしろ弟は始て溫き慈善を見出し感謝致候願くば天父の御手此事業の上にあらんとを嗚呼弟は始めて基督のゲッセマネの御苦みを悟り候始めて血汐の御汗の意味を幾分か悟り申候自己の罪にのみ苦みし時は解する能はざりしに自己の心より出ざる罪過の爲に苦む人を思ひやりて始めて救主の十字架も解し初め申候。

今回の三國干渉に就き小弟は愈國民が我帝國の天職を自覺せざる可らざるを感じ申候文明國と自稱する歐洲諸國は唯自利をのみ圖りて一も人類の大目的の爲に働かず面に正義を装ふて呑小食弱を事とす此の道義の暗國界に立て日本帝國は願くば義俠の天使となり自利を忘れて此天職の爲に兵を練り力を養はんことを祈る。

嘗て一度見し芙蓉峰に對しての感を記したる者と他に一篇貴覽に入れ申候間御斧正下被度候

たかき哉　あゝたかきかな　富士の高根
白雪を　冠となして　空をつき
聖人等の　心のごとく　天にたつ
たかきかな　あゝたかきかな　富士の高根
はてしなき　大平洋の　波蹴りて
大空の　御殿に登る　大陽を
いやさきに　迎ふるものは　いましなり
大能の　エホバのみ手が　我國を
大わだの　深き底より　引揚げて
動きなき　國の基を　すえしより
天地の　あらむかぎりは　くにたみに
敬虔と　正義のおもひ　みたしつゝ
汚れなき　人と思を　おなじくし
天かした　一人の義人　なしとまで
おもふとき　心はげます　友となり
忠と義の　かゞみとなりて　世をてらす
聖きかな　あゝ聖き哉　富士の高根
天津日の　光をうけて　ゑめるとき
うつくしき　いましが姿　處女にて
たちわたる　霞の奥に　れふるとき
あいらしき　いましがさまは　乳見なれど
大岩を　さばすはやちの　吹くときも
稲妻の　いましが様の　裂くときも
かはりなき　雲の高根を　けだかさよ
世の人の　おそれいたゞく　大將も
ひれふして　いましをあがむる　ほかぞなき
いましこそ　大和をのこの　心なれ
いましこそ　やまとをみなの　かゞみなれ
はれし日は　はてなき空を　屋根となし
くもる日は　うづまき登る　黑雲を
身にまとふ　衣となして　なりどよむ
雷は　いましがうたふ　讃美なり
荒鷲も　ゑらべあはせて　うたふなり
日の本の　うらやすらけく　をさまりて
清ければ　神の惠を　ゑめしつゝ
汚るれば　烟をはきて　もえあがり
腐れたる　人の心を　ふるはしめ
罪をやく　おほみ怒を　しめすなり
たかきかな　あゝたかき哉　富士の高根
とこしへに　いましは國の　生命なり。

昨年の今頃なりき透谷君の逝去を新聞紙上に見たるが弟は其時迄幾度となく透谷君に交誼を願はんとして而も弟が性質の内氣は終に手紙を書しめず爲に君の死を聞きて深く失望致し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

候爾來多くの人々は透谷君の死を論じて或は嘲り或は笑ひ或は亦發狂とし或は美の神使に連れ去られたりといひ或は理想の世界に焦れて此世を捨てたりといひ友人なる湖處子而も天然詩人として世に立つ湖處子すら透谷君を以て名譽心の強くして其滿足を得ざりしが一の原因なりとまでいはれ候へしが弟は其何れか當れりや知らず候へ共弟よりして見れば透谷君の死因は或は君の最も美の純粹なるものとして亦殆ど君の詩想の原泉として猶其上に此醜惡なる濁世のうちに於て唯一の喜悦として殆ど生命の如く愛好せられたる處女の純潔を無殘なる此世に汚し汚して猶ほ飽き足らず或は殘忍なる運命のうちに驅り込むを見て堪がたき思をなし給へしにはあらざるか弟や不肖にして未だ君の心を知らずとはいへ或る二人の小女を見て深く處女の純潔の美に感じ申したるが其後益々弟か記臆に殘りていふ可らざる幸を弟に與へ居り候故君が嘗て處女の純潔を論じ給へし文中に

　天地愛好すべき者多し而して尤も愛好すべきは處女の純潔なる哉

といはれ亦

　われ語を極めてわが愛好するものを嘉賞せんとするも人間の言語恐らくば此至寶を形容し盡くすこと能はざるべし

といはれしは誠によく透谷君の衷情を吐き給へし者と思はれ申候小弟の如き感情激烈にして忌はしき誘惑と炎の如き憤怒とに苦みし者には處女の純潔ほど好ましく慕はしき者なく透谷君の御心中同情に堪ず候一度天然の愛に心を任して此世の中を歩く時弟は始めて弟か今まで感じて而も解し難かりし人性の美を知り而して最も此自然の愛に通ひ居る處女の心愛らしとも何ともいひ難きを感じ彼等を思ふ時心はいつしか幼兒となるを覺え申候此靈妙幽玄のインスピレーションを弟か如き者にすら與ふる處女の純潔は透谷君の高逸なる心には如何に映じたりけむ弟にして猶ほ是を汚す世を憤ふる情に激して堪へがたきまでに思ふに一層深く味ひし透谷君には如何に烈しく感じ給へつらむ弟が廢娼論も此の處より來り申候故に小弟は當地の青年に對しても人情と美術の上より廢娼論を唱へ申居り候小弟は信ず是より以後必ず透谷君の眞情を解して其悟られし處を味ひ幽玄なる詩人の出づべきを今日の世人は君の心を解せずして妄に論じ居る樣に感ぜられ候。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

朝鮮の官妓

在朝鮮　齋藤音作

元來義州府は名妓の泉源を以て國中第一に數へらるゝ處にして、北方の美人と申は朝鮮國中誰れも知らざるものなき程の有様に候。今より四十九年前調査せる同管内の人口を見に、男は一萬八千三百七十九人女は一萬一千九百十八人にして、即ち男百人につき女六十四人しか無之、其比較上女子少數なる原因は、重に官妓輸出の影響なるべしと被存候。然ば此國に於て隱然大勢力を有し該國腐敗の一大病毒たる官妓に就いての調査、當義州府を以て第一好當の場所と存ぜられ候。然りながら此事たる小生に取りては至難の事業にして、到底秘蘊を覺破すべきにあらず、其多少の誤謬あるは固より期する處に候へども、亦以て幾分の御參考に相成候事と存概略申述へ候。

(一)官妓の種別

官妓と稱するもの二種あり、其乙種は日本藝妓と娼妓とを兼れたるものにして、純然たる墮落者なり。此者官衙に當直する外常に家に在りて客を引く。甲種は品位稍之に優り、其目的貴人に知られて殊寵を蒙くるあるが故に、家に在りては營業を爲すことなく、唯糸竹、歌舞、習字、裁縫等の稽古を爲すのみ。

(二)官妓の當直

官妓は甲種乙種共に五日間宛交々其地官衙に當直す、是れ其稅なり。官級の高下によりて其人數に差等あり。義州府尹の如きは廿五名を規定とし。內品位上等なるもの五七名を坐右に殘し、他は座首執事等の下官に分配す。其當直中の任務は、炊事、掃除、取綱等の下婢的動作を爲すとなく、唯深く內部に匿れて彼等官吏の玩弄に供せらるゝのみ。其目に見ゆる日常の仕事といふは、三尺餘の烟管に烟草を詰め點火しては差出し、喫烟終れば其灰殼を掘出すなどか重なるものにて、又時としては奏樂歌舞を爲し、或は雙六に類似せる遊戲相手となり、又食事出づれば酒酌を主るに過ぎず。當府尹は家族を京城に遣し唯一人狹き官宅に居住し、執事、書記、會計等の外、通引と稱する室內の小使二三十名を置き、以て萬事を處理せしむるが故に、坐右に置かるゝ五七名の官妓は、唯無爲に苦みて、徒らに坐臥躊躇し、其在様恰も飼猫の戲れ且つ假眠する者の如し。若し來客あるときは、急ぎ側傍の狹隘薄暗き一室に避け、客長き時は多くは假眠を始む。

(三)官妓の活計

彼等の官より受くる處の給與は、唯當直中の、食事のみ其他は被服裝具は勿論日常の小費悉く自辨に屬せざるなし。尤も、乙種の目的は當直外の營業に在りて、此際相當の收入あるべしと雖も、甲種にありては其被服裝具の一般に華美なるにも係はらず、平時は毫も收入なきものとす。唯遠來の上官又は貴客あるか、或は祝賀すべき事などありて、特に盛宴を張る場合に於ては、府內の全官妓を擧げて以て其宴に侍せしむるを例とす、此場合は亦官妓の一義務にして、必らず出席を免るゝ能はざるものなり。斯くて歌舞數番、宴酣なる坐の中央に、朱塗の帆船を案置し、多妓之を圍繞して盛んに一種の歌舞を爲す。間名妓と稱せらるゝもの數罫紙硯を持廻りて、上客より漸次に花即ち賞與金の記入を請ひ宴終りて後其品等に應じ分配を爲す。此分配は重に甲種特に其上位に在るものに歸す、是れ甲種平時の收入なり。

甲種の官妓は其各自の希望と品位とによりて、或は數百十圓或は數千圓の價値を定め、一時に之を給與するの貴人あるにあらざれば、決して其身を許すとなし。而して一旦其身を許す時は、永く妾侍して又官妓の勤めを爲すとなし。即ち中以下のものは容易に普通地方官等の妾として盛んに各地に移轉すと雖も、其上等に位する少數者に在りては、自ら品格を保ちて容易に屈するとなく、只京地より貴官の巡行あるを俟ちて、之が撰にあづかるを希望するのみ、但し官妓は甲種と雖も決して正妻たるの資格なきものとす。

(四)官妓の性質

官妓は其始め多くは甲種を希望すと雖も、經濟上及ひ年齡に制せられて漸次乙種に轉す。故に乙種は概して下等社會より出で。其下賤にして破廉耻なると殆ど言語に絕えずと雖も、甲種の重なるものにありては多くは中以上の頭子より出て、

且つ專ら裕々たる朝鮮貴人の嗜好に適する爲に、恰も深窓の令孃に於けるが如き教育を施すが故に、其品位自ら高尙にして、多くは天眞優雅充分の乙女心をなし必ずしも羞花閉月の容姿を具ふるにあらずと雖も、一見以て乙種と區別するに難からず、故に親しく之に接して其無邪氣の有樣を見る時は、此花の如き可憐の少女、如何にして國家を腐敗するに至るかと怪まるゝも、亦靜て思ふ時は、既に賣られて妾となり、初めて世の風波に遭ふや、妬心燃え、慾心增長し、詐謀出て、惡計起り、天使茲に忽ち變して惡魔となる、其狀鷄卵の腐敗して、滋養忽ち猛毒に化すると一般豈に痛嘆に堪ゆべけんや。巖本君の「乙女の贊」實に讀再讀して涙なき能はず。嗚呼此優々如たる可憐の乙女、如何にして其麗はしさを未だ失はざるに救ひ得んか。

（五）一輪の梅花名妓を動かす

甲種の粹は常に府尹の坐右に在りと雖も、之に接近する容易ならず、韓客すら來るあれば忽ち隱匿する習慣なれば、況して異邦の軍人をや。余や公用にて時ありて府尹の宅に出入せりと雖も、其初めは斯るものゝ有無すら知るを得ざりき。元來府尹趙載觀氏は位二品、官敕任の上位にあり、兵使たるもの四回、韓廷武官中錚々たるものにして、年齡五十を越え、溫厚誠實一見君子の風あり。昨年平壤府の陷るや、韓廷特に此人物を撰拔して、國境の要地義州府の牧者たらしむ。故に氏は職府尹にありと雖も官は却つて宣諭使の上にあり。時ありて時事を談ずるに頗る緊切に當る、氏亦計劃常に朝鮮國に同情を表する人を悅び、漸次親交を重ね一日談會々朝鮮國の宿弊病根に及び、漸次溯りて當國女子教育の必要に至る。氏亦頗る之を賛成し、遂に余に許すに官妓の交友を以てし、其後往く每に必ず官妓に同席を命ずるを例とせり。然るに其始めや甲種のもの出で來らず、下官の許なる乙種の轉婆を傳呼して代り出でしめしとは後にて知り得たることなりし。先便官妓に付申上しは即ち此數日後にして、官妓に平氣にて客前に出で、平氣にて不作法をなし、平氣にて長舌を弄する云々記述せしは、即ち此乙種の有樣なりしなり。甲種に屬するものは、多くは是に反す、世慣れざる彼等は强き恐怖心を有し、又天眞なる乙女心を有す、彼等は薔薇花の一度瓣を開き、寒風に觸れて閉ぢ、日光に溫られて一瓣一瓣遂に漸く滿開するが如く、余が再度訪問せる折、府尹數度の

督促によりて、最も年少なるものより僅かに戶を開きて一人又一人出でゝは府尹の後方に潜めり、度々珍らしさうに余が顏を眺めては恥ぢて又潜み、溫厚の府尹をして思はず失笑するに至らしむ。府尹は交々出でゝ已が喫烟の補助を爲さしむるに其進退動作自ら前日のものに比して異なる、苦心して僅かに相親きに至れば彼等は五日每に交替するなり。而して余の訪問は此間平均二回を離しとす然かも多忙の身、公用の外は半時間も留まるを許されざるなり。斯くて三月の初旬に至る、初めは强へ且促されて僅かに出で來りし彼等は、今は小生の聲を聞つけ莞爾として嬉々走せ迎ふに至れり。腰を屈げて禮し、命を俟たずして坐蒲團を備ふに至れり。未熟ながらも端坐して公用の終はるを俟ち、疑はず恐れずして信じて物語る樣になれり。孤女學院の話は彼等の最も眞面目に聞く所なりし、姉妹諸君の內看護希望者の多きこと、寢食も忘れて寄贈品調製に餘念なきこと、多忙なる修學の暇聞くに憐むべき遺族の訪問を爲すこと等は、彼等の喜びて聽く所なりし。又女學雜誌、婦人新報等を携へ行きて其內の分り易き話を致し、或は婦人矯風會の成立、各種女學校の有樣など話す時は、彼等は珍らしく聽き居れり。余が手袋、シャツ、チヨツキ、靴足袋など、皆我邦妙齡婦人の溫手に造られし溫情より贈られしものなりとて、一々指示して說明せば、彼等は感嘆しつゝ傍に寄り來りて、熱心に熟視し、尙ほ物足らず思ひしや、强て軍服を脫するを請ひ、シヤツ、チヨツキに至るまで、無邪氣に前後より擦りなどして熱視せり。又彼等の最も珍重して視、且悅んで聽く處のものは、姉妹諸君より惠まれたる溫かき玉章にてありし。一夜府の內外を巡察し終りて、歸途府尹を訪ひ香床しき梅花を籠めて、贈られたる或る姉妹の玉章を示し、敷延して一々說き聞せし後、我邦姉妹君の心情如何に高尙に、如何に可憐なるかを、說き、夫れより此地方には決して觀る能はず、唯此姉妹の床しき心より我等のみ觀得る梅花につき、其嚴烈なる霜雪をしのぎて、節操を固く把持する故、天は此健忍不撓の花を賞して、目立つ處の色よりも芳はしき香を與へたるを說き、我邦婦人の多くは、色濃き何の香なき一夜にて散る櫻花を理想するを說き、官妓は縱令甲種に屬するものと雖も、遂には奴隸として賣られ獸類にも劣る恥辱を受け其外觀は櫻花の艷美なるに似るも、其實は櫻花よりも尙ほ賤むべき所以、又眞面目に其職分を守りてイソ〱敷勞働する村娘は、其色敢て艶なるにあらざるも恰も此梅花の如きものにて、言ふべからざるの香を存し、余

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

は却て之を貴重する趣きを說き、夫れより語を進めて、婦人の貞節及本分たる天職の尊貴なるを、之を自棄するものゝ甚だ賤むべきを、又朝鮮國の婦人として、目下の責務即ち今日朝鮮國の國運を開くとは、此國の婦人の潜勢力甚大切なるのみならず、若し今後尙ほ官妓など澤山あるに於ては遂には此國も滅亡に歸せざるべからざる故、一人にても此數を減ずるとは、國の爲め大に悅ぶべきなり、特に今日に於て自ら奮つて此例を現はし見事なる手本を示すに於ては、國家に對しての忠節、此上なく天も亦厚く之を賞するに於て、吝ならざるべく、余は官妓中の粹なる汝等の內に追つては斯かる目出度、特志奮起者の續出せんを、希望して已まざる處なり云々。徐ろに說諭せしに其坐に在りし府尹を始め、五人の官妓は何れも能く靜聽し居りしが、就中、兼て余に最も親み、熱心に日本の女禮及婦人の「タシナミ」など學び、又いろはまで余の描き手本によりて稽古中なりし月嬋(ゲッセン)と申す一人の官妓は、頗る深く感動せしものと見へ、端坐首を垂れて、沈思し、兩眼に玉涙を浮べ居りし故、余は之を慰めんとて、梅花の一輪を取り、手づから彼に與へしに、彼れ急に繁喜微笑して曰く、「然し……之を贈られし方の御心を思ふては、妾は如何で之を受け得んと」、余は推して曰く、實に然り、是れ余に取りては千金にも換へ難き最も貴重の品、去りながら、余は今悅んで之を汝に割與するなり、汝幸に永く珍重して、紀念に供せられよと。斯くて府尹の今夜は特に善き御話を聽きましたとの謝辭を耳にしつゝ、イソ／＼歟、月嬋の揃ひくれたる靴を穿ちて、辭し歸りしは既に夜の二時過ぐる頃にてありし。偖て圖らずも、惜しき梅花の一輪を割與せし此月嬋と申すは芳紀十九、當義州府第一の名妓にて、頗る自尊の精神に富み、悅んで余が眞理の談を了解し、確かに群鷄中の一鶴、打粉常に淡々たりと雖も、容儀端莊にして、言節あり、擧止怜俐にして、歌舞音曲に巧に且つ楚々人を動かす天禀の態度ありし故、從つて衆人の愛顧を集注し、盛宴の折には每に特別の賞典を與へられ、衣服といひ、裝具と云ひ、所持品と云ひ、當府幾百の官妓中、固より一人の比肩すべきものなかりし由なるが、其翌朝彼は斷然覺悟する處ありて急に官妓の廢止を申出で、高貴なる總ての所持品は或は賣却し或は朋友に配ちなどして、一品をも留めず、唯單辨(ひとへ)の梅花一輪を七重八重に包みて、其香失せじと、恭しく仕舞込み、是れよりは、綿布着て粟飯食ひ日々田圃に出でゝ働かんとて、勇みつゝ、義州府を距る五里半なる己が里へと歸り去れり。兼て知る、彼は唯一人の老母ありと。嗚呼、彼は遂に此梅花の芳香を全ふするを得べき乎、余は深く感謝し、謹て祈ると切なり。

(六)府尹

容易に動かざるもの、一旦動く時は小兒の如し。義州府尹の如きは實に然りとす一度余を信じて彼の衷心に異響を覺ゆるや余れ官妓の弊害を說けば彼れ即日より官妓の己が居宅に宿泊するを嚴禁し、余れ肉刑の惡むべく懲役の寧ろ利益あるを說けば、翌朝即ち市街に於て糞尿を取形付くる罪人あるを見る。余れ市街を掃除して其汚物を肥料に供するの得策なるを說けば、彼は直ちに官吏を派出して、戶每に之を勸告せしめ。余町名を定め、番地を規定し、門札を揭ぐるの便利を說けば、城の內外、數日ならずして、余が言ひし處の如し。余朝鮮人民の懶惰を說き、上に立つもの先つ已を正さゞるべからずと諷せば、正午頃僅かに起出でゝ、終日終夜殆んど、喫咽に餘念なかりし彼は今や、每朝七時頃より、司令部又は倉庫の前に出張して、人夫を世話する官吏の指揮を爲しつゝあるなり。甚だしきは一日彼れを訪ひし時、彼れ筆を造らしむるに、竹管なくして、困る旨話せし故、貴官の烟管其長さを半減するを得ば幾万の筆管立處に出づべきにあらずや、國民の氣風は、恰も烟管の長短に比例す、今日此氣長なる國民を改造せんと欲せば、先づ以て、煙管を短縮するに如かずと戲言一番洪笑の後、勿論兵器中の矢の柄若干を分與する旨、約して歸りしが、彼は余の歸るや否や直ちに使を日本商人に走せ許多の卷烟草を購求めて其後は頻りに之を試み居るを見る。今や余は半途義州を去りしと雖も、余が爲さんと欲せし多くは既に大抵に彼に話し置けり、余が心竝を以て聊か安如たるものあるが如し。

(七)離別

余が出發の前夜、府尹使を以て余を招く、到れば五名の官妓更衣して待てり、何れも精撰せる甲種の上位に在るもの、斯くて熱心得意の歌舞をなし叉音樂を和す精技妙音亦平日の比にあらず。斯くて、府尹は一詩を賦して余に贈り五名の官妓を顧みて曰く、今や齋藤大人と相別るゝに臨み、余は之に餞するに我邦婦人服の雛形を以てせんとす、誰か能く之が調製の任に當るものぞ、と。一妓聲に應じて曰く、妾願くは其任に當らんと、是れ唱歌義州第一と稱せられ月嬋に次ぐの名妓にして名は、綠葉、年は十九、蓋し此品日本婦人服改良の好參考品、諸君の御笑覽に供する或は遠からざるべし。

片々

○貴婦人の義捐金募集

公、侯、伯、子、男爵の各夫人發企せられて陣歿者遺族の爲に義捐金を募集せられ、又、華族女學校の女教師諸君は、殉國豫後備兵が遺族の爲に同じく募集せらる。双ら美擧なる哉。蓋し、貴婦人諸氏が、現時に對する最良の慰藉同情は、これなり。

○第三回女子夏季學校

西京に開かるべかりし同校は、俄かに中止されたり。左れど、京濱間に於てはこさし特に開かるべき女子夏季學會は、優に其欠を補ひ、東京に於て九月三日より開會、特に著名の講師を多く聘待せらるべきよし。

○埼玉縣公娼設置問題

公娼新設反對同盟會の勢力は隆熾なりき。縣會に出づべしと待構へられし、新設の建議は遂に出です。ことしは、無事に勝利となれり。

○朝鮮婦人最初の留學生

朝鮮人兩班河相驥、其夫人金氏と共に來り留學す。金氏は、目下神田の一校に於て女生十數名に朝鮮語を教授しつゝあり。去七日、明治女學校を參觀し種々の問を試みたりとぞ。去十三日の日出新聞にも亦左の一項あり。

朝鮮農商工部主事孫永吉氏等の一行の目的は本邦農商工業の視察にありしも随行員中には儒者あり事業家あり京都巡覽中も各其好む處に從ひ熱心に質問又は取調を爲し見るもの聞くもの凡べて彼等を驚かさゞるはなかりしが一行中の劉堂と云へるは教育熱心家の由にて一行の高等女學校を參觀するや最初は唯だ女子を集め衣服を飾りて躰裁を裝ひ居れるものと考へしと見へ一向感じたる様子もなかりしが河原校長より同校創設當初以來の經歷及び現况を聞き各教室を巡覽するに及んで大に女子教育の必要を悟りしものゝ如く劉堂は河原校長に向ひ歸國の上は本年八歲になる自分の女子を遣はすべければ同校に留學せしめられたき旨懇望せしが河原校長は本校に入學せんと欲せば先づ小學教育より順次に科程を經ざるべからずと懇々說示せしも彼れは尙ほ斷念せず暇乞の爲め府廳に出頭し一坂書記官に面會せしときも再び同様の希望を述べしかば書記官は河原氏と同様に之を諭し且つ幼女を一人留學せしむるより寧ろ十名以上の女學生を留學せしむる方得策なるべし左すれば及ぶだけの盡力を爲すべしと告げたるに劉は大に其厚意を謝し歸國の上女學生派遣に力を盡くすべき旨を答へて退出したる由

◉保姆講習所設置計畫　東京府下は兒童の教育養成に必要なる保姆の欠乏せるを以て有志者之を憂ひ東京教育會へ建議するもの續々あり同會は保姆講習所設置の方法等に就て協議を凝らさんため近日商議員會を開くと云ふ

◉熊本高等女學校設立の議　熊本縣廳は曩に縣教育會に向つて高等女學校設立の議を諮問せしに同會は今日の場合は未だ設立するに適せずとて答申するに至りたり然るに當局者は此答申意見に關せず本年度の縣會は設立諮問案を提出するに至るならんと云ふ

◉女生徒募集　女子高等師範學校にては來る七月中旬補欠生十二名の臨時入學試驗を行ひ九月初旬入學を許す筈

◉函館婦人矯風會の美擧　函館婦人矯風會にては函館軍人家族保護會へ照會の上現に遠征の途にある軍人家族中疾病に罹り居る者のため無料にて施與療治する趣きにて既に夫々の手續をなしたりと而して外科は桑原病院に内科は吉田茂人氏に何れも同會より囑托したるよし

◉長崎保姆教育所　長崎婦人會の催しにかゝる保姆教育所は愈々去廿八日を以て設立出願に及びしが市内各小學校女教員の内教育の任に留り度旨同時に四五名出願のものある由

◉萬國婦人禁酒會總會　本月十四日より廿一日まで米國シカゴ市に於て萬國婦人禁酒會總會を開くよしにて東京婦人禁酒會へも該會頭ウヰラード孃より來會を申込み來りたるも同會よりは都合により何人をも派遣せざる由

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◉山口縣　にては師範學校女子部を廢止するに决したる今日女敎員雇入の申込甚だ多しと云ふ、流行は滅多に逐ふべからず(敎育時論)

◉紅情綠意　萍花生、每日新聞紙上に、看護婦の生涯を叙す。上中下三篇、去卅一日より當四日に及ぶ。

◉阿嬌、西より來る、相公怡々　六月一日每日新聞紙上。

◉伯林の結婚時期　英國ウエストミニスター　ガゼットの云ふ所に依れば獨逸伯林府に於て婚嫁の數特に多き時節は十月と四月にて結納の取り遣り盛なり特に此二箇月に限り婚姻の多き理由と云ふは翌月の五月十一月は新宅に移轉するに最良の時なりとの信仰に由るものなりと扨て千八百九十三年の婚姻統計表此頃公にせられしが其中最も年長けたる婿君は八十三歲の鰥夫にて其嫁殿は六十三歲次に七十歲以上の九老人も結婚し又十六歲の娘四十四人は十九歲の婿を第一の若手とし種々の年輩の男に嫁せり就中奇妙なるは七十三歲の老人二十六歲の婦人と夫妻となり五十一の男十七の少女と二世を契りしにあり今此婚姻の統計中五十件丈けに就き男女の間の平均年齡の差を見るに婦人の方三十歲若し尙ほ一つの奇と云ふは一男子は五回鰥夫となり遂に寡婦と結婚し又一紳士は三度離婚したる末處女を妻にし一貴女は離婚の爲め三回法廷の門を潛りしが遂に一少年と結婚せしよし(六月九日、時事新報)

◉一女の文　越後栃尾鄉の某女が文なりとて、平等新聞(五月卅一日)が揭ぐるもの左の如し

これから、あたゝかなる、ま事にいゝれがのんし、おまいわまめだかい、なにだい、をれわほんにまめだがのんし、おいらはをまいがくろかとおもて、まちているども、いゝたいこれのんし、このかいたのかついたら、どうでもきてくらしやれ、ほんのこんだぜい、おそだないぜ、

◉女劍舞　女劍舞の流行を心にくしと近頃ろ評せし新聞もあるが、鹿島にて去月十八日祝捷會の折に出でたる餘興の內寶集舍裁縫女生徒十六名より成りし女劍舞の一團躰は市下小納屋の裁縫敎師堀江久吉の女生徒中拾六名にて思ひ立ち振武館の劍客蓑田某に就て劍舞の敎授を受けたるものゝ由にて他の踊組等と違ひ他より寄附金を募りて助力を求めたるものにあらず去れば翌十九日の如き加納知事及び其の他數十ヶ所より纏頭を貰ひしも皆な部坐に返戻せしと云ふ(鹿島新聞、五月廿三日)

◉看護婦美談　東京本鄉區看護婦會長秋間爲子は日淸戰爭の始め同志者九名を語らひ假令異域に於て斃るゝともあるも更に遺憾なしとの親戚の證明を得たる上何れも渡淸して看護の任に當らんことを其筋へ出願したるに其筋にても右の請を容れ廣島豫備病院へ派遣することゝなり爾來同院に於て熱心に看護の事務に從事し居れり素より志願の事とて報酬等も受けず餘りに氣の毒なればとて或時赤十字社より手當として金七十圓を增與したるに右の十名は其中の半額を割きて直ちに赤十字社へ寄附したりと篤志淸廉看護婦中の一美談といふべし(第貳拾九號愛國)

◉教育大會に於ける女學　に關する决議に云く、

第一高等女學校に於ては自活的技能を授くるを主とすべきか、將內助的婦人を養成するを主とすべきか、

大多數を以て、內助的婦人を養成するに决す。

第二女生徒體操科受持は、男敎員、女敎員、何れを適當とすべきか、

大多數を以、女敎員を適當とするとに决す。

○農間女子の健康

（新渡戶稻造）

抑々婦人が田舍に於て短命なることとは統計上果して確實なりとせば其理由如何假令想像的にても之れを推究すること必要ならん余が考ふる所に由れば第一婦人の性質たる內氣にして己れが家を以て一世界とすれども他人の交際は決して厭ふものにあらず否社交を好むの性情は男子よりも發達せり俚言に婦女の饒舌と云ふは此性情を言ひ現はせるものにして若し相共に語るものなければ心氣鬱屈し隨て身體の健康を害するに至るべし村落に住する婦女は其交際狹くして心神を舒すの道少し是れ短命の一源因なり又都會にては分業盛んに行はれ身體柔弱なるものは分業行はれ難きものに屬せり昔話に老爺は山に登りて薪を伐り老婆は川に行きて衣を濯くと云ふは幾分か分業を示せるものなれども之れを都會に比すれば婦人の事業概して腕力を要するもの多し之れが爲め女子の體力早衰するにあらざるか又都會にありては女子出產の際に產婆醫師の如きものありて其看護を得易きに由り死亡するもの多からずと雖ども村落は然らず白耳義國の統計を見るに女子の分娩即ち十八歲より四十歲迄の間は田舍に於て死亡者多きは之れに源因するにあらざ

るか、

農業は女子の爲めに不幸なる結果を呈する此の如きなりと雖ども生產力に至ては田舍の婦人最も盛なりとす徂徠政談に曰はく「武家の妻君御城下に住む時は次第に奢りて身を倦し病者になる故其腹に生るゝ子柔弱にて今は何の用に立ぬやうに相成りたり」是れ亦田舍に住みぬれば自から機など織りて身をこなし奢りも薄く身も強くなりて武家の妻女に相應すべしと又英國の諺に曰く「龍動に住すれば其家三代繼續せず」と其他如何なる大都會に於ても新しき血統を受けざる家は二百年を經れば必ず滅亡すと云ふ（統計集誌、第百六十六號）

○沖繩の婚儀

沖繩縣那覇に行はるゝ婚儀は隨分面白き流儀なれば聞くが儘を記さん男子の四五歲より六七歲に及べば其父母は婦たるべき者を撰び氷人を介して婦の父母に緣談を申込み吉日を卜して禮物を持せ婦家に謝禮す是れ我が結納と相似たり婚期（大抵十八九歲を以て通例とするも十五六歲にて行ふものあり早婚の弊多し）に及び吉日を選び更に聘物（中等以上は米一俵並金一圓或は六十錢、下等社會にては雜用錢として一二圓を贈る）を婦家に送る頓て婚禮の當日となれば聟朝衣冠（大禮服）を着て婦家に至る婦家は之を迎へて途中より竹馬を備へ聟を乘らしめ金皷を鳴らして家に至る此竹馬は再娶を戒ましむる爲めに昔よりの慣例なりとぞ斯くて婦家にては充分に聟を饗應し舅姑の酌を取替はして聟を歸らしむ該夜夫家より親迎として氷人は母及其親類屬部等數十人を伴ひて婦家に至り饗應を受け新婦を迎へ歸る此時新婦は途中朝衣を蒙ふりて其面を蔽ひ氷人、母、親類一同之に從ふ新婦の携へ來るものは梳匣、蚊帳、布團及び子孫にまで讓る事を得る丈の衣裳を入れある櫃等なり扨て夫婦水盃の禮を卒へれば新婦は姑の酌を取替して自家に立ち歸り二日を隔てゝ夜半夫家に來る而して聟殿は右の式を終てより三日間遊廓に宿泊し朋輩を招きて酒宴し四日目より夫婦始めて同居するなり此奇習は新婦の嫉妬心なからしむる爲めに出づるの說あれど如何にや（朝野新聞、五月廿日）

○有爵婦人募集金の文

第一項に記せしもの、募集文下の如し、他は本紙の廣告欄に見ゆ、

去年支那と戰開けしより三伏の候嚴冬の時に際し凡十餘月の間勇敢忠武なる我陸海の軍隊が彼の北清の野に屯し黃海の波に漂ひ或は瀧なす汗に塗れ燬くが如き暑さを忍び或は雪を衾とし氷を枕とし手足も落つる寒さに耐へ身を塵芥よりも輕しとし義を磐石よりも重しとし進みて退くを知らず奮ひ戰ひて倦厭するの樣なく遂に大捷の功を奏し國威を海外に輝かし敵國をして非を悔い和を請はしむるに至り我大軍凱旋の期も將に近きに在らむとす此時に當りて生きて歸るものはこの上も無き榮譽を擔ひ到る處喝采拍手の聲に歡待せられ朋友知舊は郊に出でゝ迎へ父母妻子は門に倚りて賀し其歡び想ふべきなり

然るに戰地に於て名譽の死を遂げし戰死病歿者に於てはその報國の忠死して榮譽あることは云ふを俟たずといへどもその生きて歸るものに比すれば全く之と相反して家門の榮を見るによしなくその遺族に在りては又父たり子たり夫たるものゝ遺す聲譽の高きによりて僅に痛きを慰むるに過ぎず彼の死者の忠節遺族者の心事を思へば實に愍然に堪へざるものあり

これにより彰仁親王殿下を始め參らせ各親王妃殿下にも深く玆に御意を悼めさせ給ひかの愍むべき遺族に對し適當の物品若くは金員をおくりその心を慰め傍ら死者が國に盡しゝ義烈の萬一に酬ひんとの思召により我等同志相謀り主唱者となり廣く有志の贊同を求め此の素志を貫かんとす同情の貴夫人何とぞこの擧を贊襄し應分の金員を醵出あらんことをこひねがふ

追て御寄贈金員の取扱は專ら高崎小松宮別當へ依賴に及び置き候間東京府下は來る六月十五日地方は六月三十日迄に同氏宛にて駿河臺袋町小松宮御邸へ御廻送有之度尙ほ彼の遺族へ寄贈の方法は主唱者の評議を以て決定次第御報道致すべく候將又醵集金額は別紙の振合に付御參考迄に貴覽に入れ候尙ほ御送金の節は御宿所 詳細御記載被下度且 御一名御寄贈金の最下額は 金五十錢（數名共同の分は惣代者の名義にて送金のこと）と致候此段申副候也

日本宗教評論家之評論

日本宗教

THE REVIEW OF RELIGIOUS REVIEWS.

噫、不信の世なる哉。巧智暴に行れて人互に疑ひ更に天地を疑ふ。無禪定、無平安、於此乎、至誠なし、献牲なし、大有爲なし。夫れ此時や、大に信仰心を修養するとあらざる可らず。各宗、宗に僻し、各派、派に偏す。互に大道を私して、小岐に入る、人心未だ安んぜざるに、法士先づ争ふ。豈に救世の慈悲ならんや。戰の紀念新鮮也愛者を失へる人太だ多し。何ぞ顯正極積の傳敎なきや、吾黨素と人に敎ふ可き者に非ず。敎を請はんとする者也。則ち同志の需に代つて、茲に大公至中の法敎を要め、各宗各派の先輩に就て其敎を請ひ、總ての宗敎の精美を尋ね、所在宗敎文書に就て其福音を聞かんと欲す。若し瑕を求むれば白玉にも有り。吾黨は渴するとの急なる者に代て只た事物の善なる者を望まんとす。凡そ宗敎、皆美所あり其美を吸ひ、其粹に入り、其勢力に感じ以て活る信仰を得んと吾黨の望也。爲に此機關雜誌を新刊して其所得を公にし、同志に頒つ。吾國現在の宗敎的新聞雜誌一百五十種以上あり。吾黨は悉く之を通覽し一々其粹を拔く。讀者は乃ち其益を分取することを得ん。敎外敎心多し、所云る門外に在て深藏せるの士は。吾黨が殊に就て敎を聞き以て本誌に告白せんとする所、又、各宗の先哲現在の高德の爲には、濃かに其特得の宗敎觀と活る風采とを公にし、以て渴仰の人に示さん也。

附言。吾社は新刊の宗敎雜誌及新書(幷に普通雜誌新聞紙)を公衆の覽に供す●日本宗教毎月一回發行、一册七錢無郵稅。半年前金四十錢當月中注文者一年六十錢●廣告一行(廿四字)十錢、十行毎に減一割。初號は多數刊行し廣く配布す、宗敎的事物の廣告に善けん

七月五日初號發刊

東京麴町區下六番町六番地第七號舍

日本宗教社

第壹號豫告

肖像

雲照律師

寫眞

駿臺大聖堂

- 邦人の宗敎心　三宅雄次郎君
- 山崎闇齋　戶川殘花君
- 魯國正敎　小西增太郎君
- 和歌の宗敎　湯谷紫苑君
- 天竺新宗敎　モズムタル
- 支那回々敎　青柳猛
- 泥舟先生に槍道を聽く

新刊書、新聞、雑誌閲覧所開設廣告

今般左の所に於て、日刊新聞、雑誌、新刊書類を備え、公衆の閲覧に供す。希くは有志、陸續駕を枉げられんことを。現在備付ある種目、大凡左の如し。但し追々に諸新聞、諸雑誌を網羅して、益々整頓せしめんことを期す。

時事新報○東京日々新聞○毎日新聞○日本○讀賣新聞○國民新聞○朝野新聞○國會○東京朝日新聞○都新聞○中央新聞○二六新報○報知新聞○茨城新報○中外商業新報○山梨日々新聞○其他數種◎早稲田文學○帝國文學○太陽○哲學雑誌○教育時論○統計集誌○統計學雑誌○大日本教育會雑誌○教育氣脈○しがらみ草紙○越佐教育雑誌○國光○文學界○國家學會雑誌○東洋學藝雑誌○九州教育雑誌○東洋哲學○東京經濟雑誌○八紘○天則○國民の友○精神○精美○自由黨々報○改進黨々報○衛生新報○農業雑誌○舟江評論○九州評論○青山評論○同志社文學○東北文學○青年文○江東議會誌○評論◎十善寶窟○佛教○佛教史林○三寶叢誌○反省雑誌○密嚴教報○禪宗○禪學○救世の光○道の友○法話○佛燈○曹洞教報○傳道新誌○旭○同學○日本社○教友雑誌○卍頂○徳風○東北之光○法之雨○愛國○のりのたより○日本一○教海○彌陀の光○大同新報○成田志林○四明餘霞○眞教○明教新誌○能仁新報○大菩提會雑誌○法王○法藏◎唯一○教林○光華叢誌○風調新誌○開花の灯◎六合雑誌○基督教新聞○護教○共勵雑誌○明治清教徒○宗教○宇宙湖教○眞理○心海○正教新報○北海の光○救世○教界評論○日曜叢誌○日曜之友○東洋基督教○傳道紙○安息日學校新聞○白塔館文學○道の栞○基督教青年○聖書之友雑誌○喜之音○不知火○基督教の礎◎法の母○花の園生○婦人雑誌○女學雑誌○婦人會○裏錦○家庭雑誌○婦人新報○大日本婦人教育會雑誌○との花○清流◎國之光○禁酒界○護國の楯○光◎大日本監獄協會雑誌○獄事叢書◎文明報知○國々珍聞○少年世界○英字新聞研究錄○ゼ、レビユー、オブ、レビユース○ジヤパン、エバンヂリスト○ユニオン、シグナル○ゼ、ヤンチテル○ワールド、オブ、ブラザーフード○テンペランシ、レコルド○ホルカース○リテラリー、ダイヂエスト○ゼ、ボンベイ、ガルヂアン○（以上現在備付種目）△◎其他、工學會誌○中央時論○日本農業新誌○繪畫叢誌○風俗畫報○大日本私立衛生會雑誌○電氣學會雑誌○電氣の友○醫學雑誌○扶桑の露○東京醫學會雑誌○教育報知○判例彙報○筆の花○産業○茶業雑誌○印刷雑誌○東京物理學校雑誌○東邦協會報告○日本弘道會叢誌○伊奈公報○實業雑誌○蠶業新報○佛教通俗講義○北海の殖産○市町村雑誌○興農雑誌○文武叢誌○史學雑誌○戸籍法研究會雑誌○法學新報○工談雑誌○國家教育○武相○東京家畜雑誌○等は追々備付置きて閲覧に供すべし。但し是等の雑誌の發兌後、數日間に來駕せらるれば現時と雖も閲覧に供することあらん。外に日々續出する新刊及び古書類、若干種を備へ置く。其種類の如きは數多あれば略す。

午前七時開場、午後十時閉場、休日なし。一回（一日）見料金壹錢、十回分金九錢、二十回分金拾七錢、三十回分金貳拾三錢、十回分以上は閲覧券を渡す、但し購求者以外の人士に閲覧せしむるも妨げなし。（不日貸本部を設くべし）

麹町區下六番町六番地第七號舍

日本宗教社附屬

圖書閲覽所

六月十日より開始せり

殉國豫後備兵中憫むべき遺族を扶助せんとする主意

昨明治二十七年八月一日清國に對し宣戰の詔勅を發し給ひてより茲に二百八十有三日にして去る五月十日全國と媾和の條約を交換し給へり天下誰か喜はざる者あらん之を喜ぶと同時に故有栖州參謀總長宮殿下を始め奉り故大寺旅團長、故坂本赤城艦長以下の或は戰の爲に或は病の爲めに國難に殉せられたるを追懷せば天下誰か哀まざる者あらん

元來國家の爲めに身を致し命を殞したる軍人に對しては軍人恩給法ありて其寡婦孤兒に每年若干の扶助料を給せらるゝと雖も遺族の多少を問はずして唯一家に若干を均給せらるゝのみ然るに徵兵令に依りて兵役に服せしめらるゝ陸軍の常備兵は其年齡二十歲より二十三歲(海軍は二十四歲)にして未だ人の子弟たる者多く其死生一家の浮沈を來すこと蓋し少なかるべければ暫く之を他日に讓り先づ豫後備兵に就きて謂はんに豫後備兵は其年齡二十四歲(海軍は二十五歲)乃至三十二歲にして既に一家を養育の責任あり其死生に由りて一家の興亡を招く者極めて多く其甚だしき老親は病床に在り嬰兒は飢に泣くの慘狀を呈する者亦少なからざるべし

最近の調査に依れば一家の人口は平均五人三分弱なるに彼の軍人恩給法に依りて陸軍兵卒の遺族に給せらるゝ扶助料は一年金參拾圓(海軍は貳拾四圓乃至參拾八圓)にして之を一日に分てば金八錢參厘強に過ぎず八錢強を以て一家五人餘の衣食住に充つることは頗る難事なれば其筋に於ても他日特別の處置を施さるゝことあるべしと雖も此等遺族中既に窮餓に瀕する者ありて其事情殊に憫むべき者を救ひ以て國恩の萬分の一に報ぜんと欲するも豫後備兵の殉難者一千二百九十九人の多きに上れるを以て到底少數の微力之を能くすべきに非ず希はくば大方の慈善家同情を表せられて多少に拘はらず御義捐あらんことを

明治二十八年六月

發起人(姓名いろは順)

麴町區元平河町九番地 塙濱子

麴町區五番町四番地 小鹿島筆子

牛込區天神町七十六番地 子爵夫人 戶田清子

麴町區下二番町廿六番地 津田梅子

麴町區平河町五丁目十六番地 鵜飼信子

麴町區下二番町七十二番地 藤井やそ子

四谷區鮫町壹丁目廿三番地 柳谷千代子

四谷區本村町十三番地 木村貞子

贊成者(姓名いろは順)

伊東巳代治夫人 早川鐵治夫人 原六郎夫人 長れい子 大隈伯爵夫人 大村伯爵夫人 岡部子爵夫人 大野志げ子 渡邊男爵夫人 川村伯爵夫人 谷子爵夫人 高山紀齋夫人 鍋島侯爵夫人 中村彌六夫人 栗塚省吾夫人 山本達雄夫人 前田侯爵夫人 松方巖夫人 近衛公爵夫人 近藤廉平夫人 葦原清風夫人 榊原子爵夫人 水野子爵夫人 莊田平五郎夫人 毛利公爵夫人 本野一郎夫人

義捐金取扱所

京橋區三十間堀三丁目一番地 繪入日報社

京橋區尾張町新地七番地 每日新聞社

京橋區銀座四丁目四番地 朝野新聞社

各發起人宅

京橋區山下町十八番地 めざまし新聞社

京橋區日吉町四番地 國民新聞社

麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

義捐金は金拾錢以上とす

義捐金募集期限第一回は來七月十日とし第二回以下は追ひて之を定むべし

義捐金分配の方法は發起人及び贊成者協議の上之を定め陸海軍省、府縣廳、郡市區役所、町村役塲等を煩はして適宜之を遺族に送附すべし

新聞社へ送附せられたる義捐金は之を其紙上に報告するを以て領收證に代ふべし

廣告

○詩文評正○返稿三日間○潤筆料隨意○月謝金壹圓

東京市小石川區白山前町三十番地

大沼枕山男 大沼湖雲

●婦人科小兒科專門●

赤坂區丹後町壹番地 豐川稻荷側安藤邸角

女醫 大村のぶ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

(明治廿五年三月十五日遞信省認可)

女學雜誌社出版書籍

(再版)小公子	若松賤子譯	一冊廿八錢	郵稅四錢
(六版)百人一首講義	鈴木弘恭氏講	同廿八錢	同四錢
(信神孝父)腓立比物語	櫻井成明氏譯	同廿五錢	同四錢
(讃さき)猫と鼠	女學雜誌社編	同五錢	同二錢
吾黨の女子教育	巖本善治著	一冊十錢	郵稅二錢
木村鐙子小傳	同前	同十錢	同
公娼可滅	同前	同五錢	同
教育講義	同前	同十錢	同
日本女學	同前	同五錢	同
(再版)文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十六錢	同四錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同十錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同二十錢	無郵稅
俳諧史傳	小此木信一郎 布川孫市 兩君同著	同三十錢	同四錢
善の岐	中島とし子著	同二十錢	同
廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同五錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同十錢	同
兒育草	同	同八錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同十錢	同

新刊書籍

(戯曲)桂五郎	阿波鳴門左衛門著	十錢	郵稅二錢
高橋傳五郎	巖本善治編輯	五錢	郵稅二錢
偉人物	山月子稿	二錢	郵稅二錢

發行所 女學雜誌社

本社取次書籍

大奥の女中(上中下三冊正價一冊卅錢郵稅六錢宛)
日本の婦人(一冊正價五十錢、郵稅六錢)
女子の本分(一冊定價廿五錢、郵稅六錢)
透谷集(一冊定價三十八錢、郵稅六錢)
西郷隆盛傳(一冊正價三十錢、五冊一圓卅五錢)
岡山孤兒院(一冊定價二十錢、郵稅四錢)
救急看護法(一冊正價金卅五錢、郵稅貳錢)

書信は惣べて下六番町六番地宛にて御郵送被成下度候 巖本善治

女學雜誌定價表

前金	壹冊價 金拾錢 一年前金 金壹圓(無郵稅)
廣告料	一行 一回 (廿七字詰) 前金十錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年六月廿四日印刷
明治廿八年六月廿五日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場(電話十九番)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

女學雜誌社出版書籍

（再版）小公子 若松賤子譯 一冊廿八錢 郵税四錢
（六版）百人一首講義 鈴木弘恭氏講 同廿八錢 同四錢
（信神孝父）腓立比物語 櫻井成明氏譯 同廿五錢 同四錢
（書きさし）猫と鼠 女學雜誌社編 同五錢 同二錢
吾黨の女子教育 巖本善治著 一冊十錢 郵税二錢
木村鐙子小傳 同前 同十錢 同
公娼可滅 同前 同五錢 同
教育講義 同前 同十錢 同
日本女學 同前 同五錢 同
（再版）文法口授 鈴木弘恭君述 同十二錢 同
婚姻論 横山雅男君著 同十六錢 同四錢
産婦小兒攝生法 船越鼎太郎君著 同十錢 同二錢
邦文學 松山高吉君著 同二十錢 無郵税
俳諧史傳 小此木信一郎 布川孫市 兩君同著 同三十錢 同四錢
善惡の岐 中島とし子著 同二十錢 同
廢娼演說 島田三郎 植木枝盛 兩君同著 同五錢 同二錢
西洋女禮 本社著 同十錢 同
小供の話 同 同十錢 同
兒育草 同 同八錢 同
藝者と手掛 炭谷小梅女著 同十錢 同

新刊書籍

（識曲）桂五郎 阿波鳴門左衛門著 十錢 郵税二錢
高橋傳五郎 巖本善治編輯 五錢 郵税二錢
偉人物 山月子稿 二錢 郵税二錢

發行所 女學雜誌社

本社取次書籍

大奥の女中（上中下三冊正價一冊卅錢郵税六錢宛）
日本の婦人（一冊正價五十錢、郵税六錢）
女子の本分（一冊定價廿五錢、郵税六錢）
透谷集（一冊定價三十八錢、郵税六錢）
西郷隆盛傳（一冊正價三十錢、五冊一圓卅五錢）
岡山孤兒院（一冊定價二十錢、郵税四錢）
救急看護法（一冊正價金卅五錢、郵税貳錢）

書信は惣べて下六番町六番地宛にて御郵送被成下度候 巖本善治

女學雜誌定價表

前金	壹冊價 金拾錢 一年前金 金壹圓（無郵税）
廣告料	一行（廿七字詰）一回 前金十錢 同三回以上 一割引 同六回以上 二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年六月廿四日印刷
明治廿八年六月廿五日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY